硝子壜の中のエマ【長編】

花木静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子壜の中のエマ【長編】

【Ｎコード】

Ｎ９２０９Ｚ

【作者名】

花木静

【あらすじ】

奴隷制度が始まって、もう十年ほど経つ。工藤洋介は奴隷になってしまった恋人の朝子を探すため、日本中を旅している。九州のとある奴隷の街では、奴隷倉庫に入荷される奴隷を待つ毎日だ。ある日洋介は奴隷商人である中川が特別に扱う少女奴隷を見て、衝動的に買ってしまう。少女にはエマと名づけ、借家で二人暮らしを始める。後悔する洋介だが、周囲の人々に軽蔑されてもエマを売り飛ばしたりはせずに大切にするため、次第に親しくなっていく。　これは『硝子壜の中のエマ』の長編版です。設定が非常に甘い上、た

くさんの伏線を放置しているため、色々突っ込んでいただけると嬉しいです。

1

最初に選択権を与えられているのは、彼だ。工藤洋介はこの場所に立つ。迷っていようがいまいが、彼は誰かに立たされているような気持ちで立っている。それは腹立たしいことだった。許されないことだと思った。しかし、彼は立っている。選択権を与えられて、自分の意思で立っている。

この場所は、薄暗い。商品を扱う場所としては暗すぎる。しかしそれはここの天井が高すぎるせいであり、広すぎるせいであろう。あるいは、扱われる商品から漂う哀愁のためかもしれないし、商品を管理したり眺めたりする人間の後ろめたさから来るのかもしれない。少なくとも、洋介はそのような気持ちだった。

洋介が立つ真新しいコンクリートの床には、乱雑なペンキ文字で右側に「男」、左側に「女」と書いてあった。彼の目の前には、間に真っ直ぐな道を作ったその両側に二つの背の高い囲いがあり、人気のない、体育館に似たこの建物一杯に広がっていた。彼は何度か来たこの建物を、見知らぬものであるかのようにゆっくりと、警戒心をむき出しにして歩く。囲いは、明らかにベニヤの薄い板だ。壊そうと思えば壊せる。けれどどの部分も行儀よく立っているのは、商品たちが大人しいからだろう。大人しくさせられている。洋介は一瞬そう考えて首を振った。考えてはならない。深く考えたら失敗する。怯えた首長竜のように、ちっぽけな脳を麻痺させて進むしかない。それが安全な道だ。

彼がとまった床に、また文字が書いてある。「女」。かかとの後ろ側には「男」と書いてあるに違いない。ここは左右対称にできている。中川が「平等に」作っていると言っていた。客は「平等に」選ばないそうだが。

洋介はゆっくりと、「女」の囲いに入る。

かすかに光が反射している。そして陰。四角く配置された、無数

の瓶。人一人をすっぽりと入れてしまいそうな、いや、実際に入れている、巨大な瓶。牛乳瓶のような形の中に、女が入っている。裸の女。若い女ばかり。洋介を見たとたん、うつろな目でそれぞれ違う方向を見ていた女たちはすぐさま洋介に背中を向けてうずくまった。無数の背中。見えない顔。この瞬間を、洋介はいたたまれなく思う。また、苛立たしく思う。こんなところに来たくはないのに。

それでも女たちを見るしかない。女たちがどれほど怯えようと、どんな祈りをささげようと。洋介は一番近くの瓶に入った女から、じっと見た。女たちは皆が耳に開いた小さな穴にビニールの糸を通して番号のついた赤い札をつけているのだが、この女も例外ではない。細身の女。あばら骨が痛々しいほどに浮きあがっている。顔が見えないかと、角度を変える。横顔が見える。目と口を強く閉じ、寝たふりをした子供のようだ。ああ、まだこの女は若いのだ。そのとたんに彼は興味を次の女に移した。顔が見えないので、瓶を右手の人差し指の第二関節で叩く。女が顔を上げて、巨大な目で彼を見る。違う。次の女は体格からして大きすぎたので、ノックもせずに通り過ぎた。一人一人、見る。用心深く。褐色から乳色の肌をした裸の女たちは、彼が近づくたびに同じ反応をした。靴音に反応して震える。彼がノックをするとそっと、右に、あるいは左に振り向く。若い女たちは、顔まで同じに見えた。目が大きいか小さいか、唇が薄いか厚いか、輪郭が角ばっているか丸いか。そのような違いがあっても同じ表情をしていたので違いがないような気がしてくる。怯えた、痛めつけられた猫の表情。彼は感覚が麻痺してくる。女たちの顔を見分ける感覚だけでなく、女たちの気持ちに配慮しようとする感覚さえなくす。だから、次第に機械的になる。一目見てわからなければノックをする。振り向いて違うのならばその女が彼を見ていても次に移る。

ふと、手をとめる。その女の背中が、何か懐かしいような、離れがたいようなものを感じさせたのだ。女の肌は象牙色だった。肩は少し下がり気味で、胴体が細長い。形のいい尻。おそらく足は長い。

彼の位置から滑らかなひざが見えるのだ。彼は突然ひどく混乱した。汗が体中から噴き出す。熱いのか冷たいのかわからない汗。頭痛がする。額を強くノックされているような痛み。

「わたし、行くね」

誰かの優しげな声。

「どうして？」

別の誰かの甲高くなった声。

「そうするしかないでしょ。もう逃げられない」

「逃げられるよ。海外に逃げれば」

「逃げられないよ」

「そんなことないよ」

「どしようもないんだよ、洋介」

この場で展開された会話であるかのように錯覚して、次の瞬間自分がどこにいるかを認識した洋介は愕然とした。ここは、奴隷倉庫。目の前にある瓶は檻。中にいる女は、奴隷。耳につけた紙は番号札だ。彼は声をかけるのが怖かった。もし彼女だったら、目的は達成されるだろう。しかし、そのあとは？

彼はじっと立ち尽くした。目の前の女は体をますますこわばらせ、小さくしている。周囲にいる女たちの視線を感じる。洋介の品定めをしているのだ。あの奴隷はあの男に買われようとしている。果たしてそれは幸運なのか不運なのか。自分たちの幸不幸の度合いと比較して、苛立ったりほっとしたりしている。洋介が「ましな」飼い主なのかどうか。女たちの頭にあるのはそれだけだ。そこから思考が展開する。

彼の唇が開いた。

「朝子」

うずくまっていた女は、首を持ち上げ、ゆっくりと振り向ける。その表情は他の奴隷たちと同じで、ひどく無気力で怯えた顔だった。洋介は一瞬わからなくなる。この女の顔。例えば丸い輪郭だとか、長い睫毛だとか、少し平たい鼻だとかに、彼女の顔に合致するもの

があるのかどうか。彼女の顔さえ思い出せなくなる。それは危険な兆候だ。冷静な判断を下せなくなる。

しばらく女の顔を見て、違う、と思う。輪郭が同じだから錯覚を起こしたのだ。彼女の鼻はとがっている。この奴隷の顔とは違う。

彼はほっとして、力が抜けてしまった。床にしゃがみこみ、ため息をつく。こういう瞬間はいつも緊張する。そのあとの疲労感は体が一旦死んでしまったのではないかと思えるくらいだ。目の前の女がちらちらと彼を見る。彼は首を振り、君は彼女ではない、と思う。

立ち上がり、女たちの続きを見る。脱力した彼にはいささか辛い仕事だったが、何とかやり終えた。女たちは静かだった。どこまでも、静かだった。

囲いから出て、道からも出ると、奴隷倉庫の隅にある中川の部屋に向かう途中で田村に会った。田村は目つきの鋭い細身の男だ。中川の助手をしている。洋介は彼のことがそれほど好きではない。誰にしろ、この奴隷倉庫に関わる人間のことは好きではない。

「ああ、今日来るやろうと思っとったよ」

最初に声をかけたのは、田村だ。表情を変えず、何か雑多な感じのする紙束を持って中川の部屋に行く途中のようだ。洋介は不承不承にかすかな笑顔を作る。

「今日は一日ですからね」

「どう？　新しい奴隷の中に、目当ての者はおったか」

「いいえ」

「あんたも感心よなあ。奴隷になった恋人探すなんて」

「そうですか？」

洋介は苛立ちを覚えて笑顔を消した。よく言われることだ。しかし何ヶ月経ってもざらついた気持ちになる。

朝子は奴隷になった。あるときから、人権が限られた人間のものになったからだ。洋介はその限られた人間の一人だった。朝子はそうではなかった。彼女はちょっとしたきっかけで人間ではなくなり、若い女の奴隷として売買にかけられた。すぐに売れた。彼女が美し

かったからだ。
「怒んなさ。おい（おれ）は普通のことしか言えんとやけん、勘弁してさ」
田村が仏頂面で抑揚の激しい言葉を呪文のように言う。普通の感性の持ち主ならばこのような場所で稼いだ金で飯が食えるのか。洋介はそう考えたが、この男とはよい関係を築かなければならないことを思って態度に出すのはやめた。
「中川さんは」
「ああ、部屋におると思うよ。ただ、新しい奴隷のおるけん、その辺り気をつけて」
「新しい奴隷？　ここにいるのが全てではないんですか？」
「ああ、一人だけ置いとるとよ。ただあんたの恋人ではなかと思うよ。中川は若い奴隷が好きでね。あんたの恋人はあんたと同じで二十七歳やったたいね。中川は十代の子供が好きやっとよ」
それを聞いて、寒気がする。意味が簡単にわかるからだ。
「いつもそうなっているんですか？」
「どがん意味か」
「子供の奴隷は中川さんに与えられるようになっているんですか？」
田村は洋介を見ると、唇をへの字にして、
「そうさ。中川はこの街の王様やけんな。何でもできる」
と答えた。
洋介はため息をつき、自分の預金残高のことを考えた。それから、首を振る。何を考えているのだ、と自分を叱りつける。
「中川さんに会ってきます。朝子のことが何かわかったかもしれない」
洋介はため息混じりにそうつぶやいて、うなずいた田村と共に中川の部屋に向かった。倉庫の一番奥にある部屋だ。そこの扉だけは特別立派にできていて、樫製である。ノックをする。女たちが入った瓶を叩き続けた人差し指の第二関節は、どこか感覚が遠くなった気がする。

「どうぞ」
低い、柔らかな声。笑っているようなリズムだった。
「失礼します」
洋介は田村と共に入った。広い部屋だが、先程までのがらんどうのような場所にいた洋介にとっては、息苦しさを感じる。正面に堂々たる作りの机があり、その向こうにアルミサッシの窓。ベージュの安物の絨毯が敷いてある。どこかちぐはぐな感じのする部屋だった。中川の姿がない。一瞬そう思ったら、「一月ぶりやね」という声が真横からして、心臓が躍った。顔を向けると、入り口から見て右手の部屋の隅に中川がいた。先程見たのと同じ、瓶と並んで。
「お久しぶりです」
洋介が慣れた様子で頭を下げると、中川は脂ぎった丸顔をてらてらと光らせてうなずいた。機嫌がいい。子供のような顔をますます福福しい様子にしている。平均的な体つきの洋介と比べて大柄だが、この顔と太った体のお陰で無害な人間に見える。
「この子」
洋介は先程一瞥しただけの瓶に入った少女をもう一度見て、その裸の背中が先程見た女たちよりもかなり幼いのだということを確認した。少女の黒髪は伸ばしっぱなしのように不揃いで長すぎた。ただひたすらに震えている。顔は見えない。洋介は胃がひどくむかついてくるのに気づいた。
「この子、どうされるんですか」
中川は愛想よく笑い、
「どがんもせんよ」
と答えた。
「ただ置いとるだけさ」
「本当ですか？」
「本当さ」
中川はそう答えた次の瞬間、笑顔を消した。洋介を探るかのように暗い目で見る。洋介はこの目を見て、この男の疑念に気づいた。

一体、何のつもりだ？　そう思っているのだろう。
「ぼくは朝子の話をしに来ただけですから」
洋介がそう言うと、中川はまたにこにこと笑い出した。
「朝子さんね。おいも注意して見とるとけど、なかなか見つからんね」
「そうですか」
「若い女の奴隷は売りに出されるサイクルが早か。中古だとかなり早かよ」
中古。洋介は笑顔を引きつらせてこっそりと深呼吸をした。怒るな。怒ったら台無しだ。
「中古ほど顔つきが変わってくる。あんたにもらった朝子さんの写真と見比べても、見つけるとが難しくなってくるくらいさ」
それはわかる。先程見た女奴隷たちは、そんな顔をしていた。人間として生きていたときの顔とは恐らく全く違う顔。
「だから見つけるには時間のかかると思うよ。ばってん（でも）、思うとけど、いくら恋人でも、奴隷になって知らない男に好き放題にされた女なんて、買ってどがんするとか」
中川が、少女の入った瓶を、軽く叩いた。少女がおもむろに顔を上げて中川を見る。丸みを帯びた、子供じみた横顔。小動物のようにパーツが小さい。その顔が洋介をも見る。赤い唇が震えている。今にも泣きそうに。
「中川さん」
「何？」
中川が笑う。その目の奥は、やはり暗い。
「その女の子、ぼくが今買います」
少女が洋介をじっと見る。ただ怯えた目だ。隣に黙って立っていた田村がぎくりと洋介を見た。洋介をこっそりつつく。やめておけという合図なのだろう。
「どがんした、急に」
中川は笑っていたが、その表情はどこか機械的なものに見えた。

動揺は見えない。
「ただ単に、その子を買いたくなっただけです」
「へえ」
「いけませんか」
「いけんことはなかさ。お金さえあれば」
「ありますよ」
「朝子さんを買う分はあるとね？」
「ありますよ」
「返せん借金ば作ったら、あんたも即奴隷ぞ。わかっとる？」
「わかってます」
「そう」
いつの間にか、中川の笑顔が消えていた。長いため息をつく。
「しょうがなかね。田村、書類作って。今買いたいそうやけん」
「はい」
田村が部屋の外に出て行った。中川はしばらく黙っていた。少女をじっと見つめている。少女は体を覆い隠すようにして縮こまっている。
「気に入っとったとやけどねえ」
やっと発した言葉は、やけにゆっくりと聞こえた。
「知っとった？　おいがこの子ば犯(や)るつもりて」
少女の骨ばった肩が大きく揺れ、体がさらに小さくなる。
「田村が喋った？」
「いいえ」
「嘘やろ？　あいつもしょうがなかね。あんたもしょうがなか。一時の同情でそがんことばしても、あんたが面倒な事態に巻き込まれるだけぞ。せいぜい朝子さんだけにしておけばよかったとに」
洋介は黙っていた。ただ、怒っていた。中川を燃やし尽くしてしまうほどの怒りに、どうしようもなく苛立っていた。
背後で扉が開いた。田村が帰ってきたのだろう。中川が瓶から離れて洋介の目の前で紙を受け取ると、それを眺めてから洋介に差し

出した。
「サインして。あとはクレジットカードの下四桁さえ教えてくれれば、あの娘はあんたのものやけんね」
洋介は中川の顔を見た。笑っていた。その笑顔は、ぞっとする、何か人間以外の存在を想像させた。

2

奴隷倉庫にあった、大きすぎる赤いワンピースに穴の開いたスニーカー。それらを身につけた少女は、ひどく怯えたようにおどおどとしていた。洋介を恐れている。それどころか、この街全体を怖がっているのだ。

秋の夕暮れの街。背の低いビルが雑然と並んでいる。大通りの真ん中を、日本車と外国車が同じ割合で入り乱れて走る、裕福な街。それは街を行く人々の服装や振る舞いでもわかる。色のはっきりした服に、派手な化粧、きっちりした髪型、背筋を真っ直ぐにした歩き方。これらは人々の自信の現れであるように、洋介は思った。自信の元は、彼らが連れている存在でもあるだろう。奴隷。裕福な人々は太い首輪をつけた人間を連れて歩いている。

人間、と呼ぶべきだろう。洋介は自身に確認する。彼らを人間と呼ぶことをためらってしまう瞬間が訪れることを、彼は恐ろしく思う。彼らが人間でないなら、朝子は何なんだ、おれは何なんだ。人間が二つの存在として分かれるという事態は、一体何なんだ。洋介は、片方の手に少女のほっそりした手を握り、もう片方の手をこぶしにして、自分に向いているのかどうかもわからない怒りを吐息に任せた。それを見た少女が、一瞬立ちどまる。洋介ははっとして、また歩き始めた彼女を眺めた。

おれはこの子を買った。何のために？　怒りのためだ。考えすぎたせいだ。考えてはいけないと、自分に何度も言い聞かせていたのに。この子をどうするつもりだ。飼うのか？　他の人々のように。人間を動物のように飼うのか？

苦悩を表情ににじませた洋介の視線を浴びて、少女はうつむく。すると、髪の毛に隠れて見えなかった、耳の穴に通した番号札が見える。洋介は、何か決定的なものを見せられた気がした。

おれは人間を買った。もののように、買った。その事実はもう白

日の下に晒されているのだ。番号札をつけ、みすぼらしい格好をした少女を連れている。その姿は丸きり、街の連中と同じだ。
自分は違う、というはっきりしていたはずの意識が、揺らいだ気がした。洋介はいきなり少女とつないでいた手を離した。
「子供じゃないんだから、一人で歩けるだろう？」
洋介がそう言い放つと、少女は困ったように立ちどまった。目で訴えてくる。わたしは奴隷です。そう話しかけてくる。主人の言うとおりにしないといけない存在です。そう聞こえる気がする。わたしを野放しにしないでください、お願いします。
「君は奴隷でありたいの？」
洋介の苛立った声に、少女は怯えたような顔を向けた。肯定もしないし否定もしない。歩道を歩く周囲の人々の目が、少女に向けられている。その視線はすぐに流れて消えていくものだが、少女はそれを恐れている。洋介はそのことにやっと気づいた。
「ごめん。人気のないところで訊くべきだったね」
少女は驚いたように目を丸くする。洋介は自分の発言が、奴隷に対するものとしては優しすぎることに気づいた。しかし、次の瞬間には彼はにっこり笑った。自分のやり方は間違っていないと、直感に似たものが訴えかけてきた。
「おれは君のことをひどく扱う連中とは違う。君をいじめて喜んだり、君に限界を超えた労働をさせたりしない。もちろん君の体を弄んで楽しんだりも、しない」
最後の言葉を口にした瞬間、派手な服装をした女奴隷とその主人が通り過ぎた。二人とも、洋介を驚くべきものであるかのように見つめていた。それが洋介をさらに満足させた。この街の常識に反することをしていれば、自分の矜持が守られる気がした。それならば、朝子を探し続ける自分の像をいつまでも見ていられる。朝子を諦めずにいられる。
少女を連れて、洋介は機嫌よく歩いた。様々な奴隷がいた。先程の女奴隷のような、肉体美を備えた若い奴隷。荷物持ちをする、年

齢不詳の男の奴隷。中には妊娠した奴隷もいた。このときばかりは、洋介も眉をひそめた。女主人に連れられて、ボールのように膨れた腹を抱えてよろめきながら歩く。その姿には、一瞬彼の誇りを傷つけるようなものがあった。

「最近は、妊娠すらも奴隷に任せるんだ」

少女は自信なさげにとぼとぼと歩いていたが、それを聞いてそっと洋介を見た。黒い瞳が、青みを帯びた白い眼球から浮き出ている。そう見えるくらい黒さが印象的な瞳だ。迫力があるような類の目ではないのに、何か、惹きつけられる。

「妊娠って、大変らしいね。おれは女じゃないからわからない。君だって若いからわからないだろう？」

少女はうなずく。そしてもう一度彼を見る。黒い瞳で。

「そういうわけで、最近の富裕層の流行は奴隷に自分たちの子供を産ませることなんだ。簡単だよ。受精卵を奴隷の子宮に着床させればいい。そのまま奴隷のコンディションに気をつけていればいいんだ。自分たちは楽しいだけのセックスをすればいい。実際、精子をしかるべき場所で採取したあとは、男のほうは精管を切除してしまうらしい。安全なセックスのためにね」

少女は青ざめた顔を彼からそらして、うつむいた。洋介はそれを見ながら、怒りをにじませた。

「人間であることと人間でないことは、同意義になりつつあるよ。おかしな世の中だ」

洋介はしばらく黙って歩いた。少女はその一歩後ろにつき従いながら、洋介の発言を待った。待たれているということが、洋介を少し困らせた。

「奴隷はしゃべらないものなの？」

少女は少しためらい、うなずいた。黒い真っ直ぐな髪がさらさらと揺れる。

「しゃべっちゃいけないの？」

もう一度、うなずく。

「おれが許すから、しゃべりなよ」
少女はそれを聞いて、何故か切なげな顔をした。もどかしそうに手まねをして、何かを言いたがっている。洋介はため息をついた。
「中川たちが怖いの？　街の連中の視線が怖いの？　どうってことないよ。しゃべりなよ」
洋介は自分が何か悪いことを言ったことに気づいた。少女が泣きそうな顔でうつむいているからだ。慌てて、彼女の目の前に回りこむ。
「泣くなよ。何で泣くの？」
どこか幼い仕草で、少女は首を振った。洋介は彼女の肩を抱いて、あやすようにしながら歩き始めた。この子は、子供だ。おれは子供を背負い込んでしまったのだ。
「嫌なら、いいんだよ。ごめん。謝る」
少女は小さくしゃくり上げながら、洋介に身を任せていた。警戒心の壁は、一枚はがれ落ちたようだ。洋介は少しほっとしながら道の先を見た。そして、気づく。
「まずいな」
洋介の呟きに、少女は不思議そうな顔をする。洋介は彼女を見ながらもう一度つぶやいた。
「まずい」
薄暗くなった街は、少しずつ眠る準備を始めていた。会社から家に向かう会社員、主人の子供を迎えに行った帰りの奴隷、店じまいをする商店の人々。その中に、美奈はいた。洋介を見て、完全に自分のしていることを忘れている様子だ。花の入った銀色の缶を持ったまま、とまっている。洋介は少女から体を離し、美奈に近づきながら、笑顔を作る。夕方の光のために、花々はまるで絵に描いた静物に見える。
「久しぶりだね」
美奈は少女のほうをじろじろと見て、信じられないといった顔で彼のほうを向いた。洋介は、そうだろうな、と思う。美奈は、彼の

ことを朝子という哀れな女性を捜し求める悲劇の主人公であるかのように考えているからだ。
「どうしたんですか」
いきなり詰問調の声が響いた。洋介は少し、げんなりする。
「これは、この子は、違う人でしょう。あなたの恋人ではないでしょう。何で買ったとですか。何か理由があるとですか」
方言の入り混じった敬語で、美奈は一気にまくし立てた。洋介はその間考え事をしていて、彼女には何かしかるべき言葉をかけようと思っていた。
「奴隷ば買って、どがんするとですか」
「ええと」
洋介はちらりと少女を見た。彼女は完全に美奈の様子に怯えきっている。
「奴隷じゃないよ」
「え？」
少女が彼を見上げた。どうするつもりですか？　その目は言っていた。
「妹の、エマ。今日から一緒に住むんだ」
「何で嘘ばつくとですか。その格好はどう見たって奴隷じゃなかですか。わたしば馬鹿にしとっとですか？」
「いや。うーん」
少女が洋介をしきりに見る。ほら、駄目だったじゃないですか。正直に言いましょう。わたしが奴隷だって。そうすれば丸く収まります。
「エマは奴隷じゃない」
「また嘘ばついて」
「おれがそう思いたいだけだけど、君もおれにそう思わせてくれないかな。少なくとも、そういうことにしてほしい」
美奈が黙る。視線が洋介と少女の間を行ったり来たりしている。迷っているのだ。

「ほら、君はこの街では唯一の友達だし」
「わかりました」
洋介がほっとした顔になり、少女は首をかしげた。美奈はどこか不愉快そうな目で彼女を見ている。
「でも、その子ばどがんするとですか？　育てるとですか？」
「それは」
洋介は一瞬黙り、また美奈の顔を見た。
「まだ、決まってない。何も決まってないんだよ」
「何、それ」
「君に軽蔑されてもしかたないね。本当に。でも、どうしようもないんだよ。買ってしまったからにはね」
思わず口をついて出た「買う」という言葉に嫌悪感を覚える。
「おれは、この子を助けたいと思って買った。買ったからには責任を持たなければいけない。多分」
彼は少女を見下ろした。彼女はどこか不安げに立ち尽くしている。
「多分、いつか彼女を手放すことにはなるけど」
少女は彼を見て、濡れた目で視線を送った。そうなんですか？　わたしはいつかまた流れるのですか？　わたしはまだあなたを信用してはいないけれど、何だか悲しいです。
彼はそんな少女の目を見て、言葉を失った。続きが頭に浮かばない。
「そうですか」
美奈がため息をつきながら、地面に置いていた缶を持ち上げた。
「そうすればよかですよ」
「うん」
彼は美奈と少女の両方を見ながら、うなずいた。
「そうするしかないからね」
美奈は何でもなさそうに作業を始めた。洋介はそれを見て、もう潮時だと気づいて歩き出した。そのあとを少女が追う。
「今日の美奈さんは少し感じが悪かった。いつもはああじゃないよ。

すごくよくしてくれるんだ」
大通りから、細い道に入る。少女は少しためらい、歩調を合わせてついて来る。
「花なんて、一度買ったきりなんだけどね」
その花は、朝子の写真にささげたのだった。大きな白い、カサブランカ。そうしてから、洋介はすぐに嫌な気分になって花を捨てた。遺影じゃあるまいし。彼は笑ってつぶやいた。そのあと、少し泣いた。重い空気に押しつぶされそうになり、それがすぐに終わるとは思えなくなってきたころのことだった。
美奈にとうとうと事情を話すと、彼女は彼に同情した。彼が月に一度、奴隷倉庫に向かうとき、美奈は彼を元気付ける。自暴自棄になって帰っているとき、彼女は彼を励ます。四ヶ月の滞在の間に、洋介と美奈は至極真っ当な友情を育んでいた。しかし、今回のことで見放されてしまったかもしれないな、と洋介は苦笑した。
少女が洋介をじっと見つめている。注意深く、彼の表情を観察している。彼は思わず声をかけた。
「エマ」
少女が首をかしげる。洋介は少し考えて、
「エマって呼んでいい？」
と訊いた。少女はじっと考えている。
「君の本名を教えてくれるの？」
少女は首を振る。また手まねを始めそうになったので、彼はそれを押さえてやめさせた。
「わかってる。君は事情があって話せない。文字も書けない？」
少女がうなずく。ほとんど仏頂面だ。
「わかった。でもそれならエマって呼ばせてよ。名前がないものと、どうやって暮らせばいいんだよ」
少女は首をかしげて考え込み、やがて彼の目をじっと見つめた。それでいいです。その目はそう言っていた。
「一瞬思い出したんだ。『笑まひ』って言葉。微笑むことって意味

だよ。いい名前だと思うよ、自分でも」
「エマ」と名づけられたばかりの少女は、彼が話すのをじっと聞いていたが、道がさらに細くなり、やがて小さな家が曲がりくねった小川沿いに多く立ち並ぶ街並みに入ると、不安を表情で示した。
「何？」
洋介は笑いながらその中の一軒に入ろうとしていた。木造で、壁は茶色いトタンで覆われている。新しいとは決して言えない陰気な家。ここは、彼の仮の住まいだった。エマはそこに入るのをひどく恐れていた。彼はその不安をやっとのことで感じ取り、不愉快になった。
「おれは、違うんだよ、エマ。他の連中とは違うんだ。言っただろう？」
エマは唇をぎゅっと結んで、子供のようにいやいやをした。彼は苛立ち、彼女の手を握り、
「腹が立つな」
と彼女を暗い玄関に引っ張り込んだ。

3

玄関に入った途端に、エマは急に大人しくなった。それでも洋介は苛々しながら電灯を点け、先に靴を脱いで短い廊下から一つの部屋に入った。この家はかび臭い。それに狭くて古い。何もかも旧式で、不便だ。それでも四ヶ月も住めば慣れてくる。洋介が入った部屋は、家の奥にある居間だった。テレビはなく、銀色のノートパソコンが一台、古いちゃぶ台に載っているきりだ。床は黄色くなった畳で、八畳程度の広さだ。洋介は閉じたノートパソコンの前にどすんと腰を下ろしてあぐらをかき、横目で黄ばんだ襖を眺めた。それはゆっくりと滑り、エマがのろのろと入ってきた。うつむいて、不安そうに。

「何がそんなに不安なわけ？　おれはそんなに信用ならない？」

ただ立ち尽くすエマを見て、洋介はため息をつく。

「今の質問、首を振るだけでいい質問だったよね」

エマの赤い唇がぎゅっと結ばれ、涙がぽつりと畳に落ちる。彼女はそれを懸命に手で拭こうとする。

「君ってすぐ泣くんだね。君くらいの女の子はよく泣くんだろうけどさ。でもおれとしては泣かない女の子のほうが一緒に暮らしやすいね。どうにかならない？」

洋介の辛辣な言葉のためにエマは涙がとまらない。それでも嗚咽を漏らしはせずにただ耐えている。洋介はまた大きなため息をついてつぶやいた。

「風呂に入ってきなよ。もう夕方だし、君はそんなに清潔じゃない。瓶はあまりきれいじゃなかったからね。着替えは脱衣所に用意しておく。話があるから早く入っておいで」

エマは少し戸惑ったように洋介を見た。青ざめていて、目が真っ赤だ。洋介は虫を追い払うような仕草で、エマを部屋から追い出した。彼女はまたのろのろと、家の一番奥にある風呂に向かった。洋

介はじっとしていたが、ようやく腰を上げると、部屋の隅にあるプラスチックの衣類ケースをかき回し始めた。
エマが風呂から上がるときには、洋介の機嫌は直っていた。ぶかぶかの男物のTシャツとハーフパンツを着た彼女を、洋介は笑って迎えた。
「思った以上に君は小柄だね」
エマはただ戸惑ったように濡れた髪を撫でた。洋介はちゃぶ台に載っていたプラスチックの青い櫛を差し出す。エマはそれを受け取ると、立ったまま髪を左右に二つに分け、梳かし始めた。水滴がぽたぽたと落ちる。そのたびにエマはタオルで髪を拭く。しかし長すぎる髪は腰ほどもあり、今まで櫛を通していなかったのだろう、すぐに絡まってしまった。洋介はエマを畳に座らせて、自ら櫛を持った。エマがおどおどと恐れているのも構わず、毛先のほうから少しずつ梳かした。
「君、女の子なのに髪の扱い方も知らないんだね。長い髪は毛先から順々に梳かしていくものだよ」
柔らかな細い髪は、濡れてつやつやと輝いている。エマはこわばったように動かない。
「いつから長くしてるのかな。この長さじゃずいぶんほったらかしにしてきたんだろうね。明日、切ろうか。長い髪を少し短くするくらいならおれにだってできるよ。前髪も作ったほうがいいね。君は童顔だから、そのほうが似合うかも。山口小夜子みたいなおかっぱ頭でもいいけど、君は長いほうがいいんだろう？」
エマが初めて反応して、こくりとうなずいた。
「君のものが色々必要になるね。服と靴。ヘアブラシだって必要だ。おれはこの櫛しか持たないから。おれはそんなに裕福じゃないから高いものは買えないけど、女の子が喜ぶような店で君の買い物をする余裕はあるよ」
エマは少し考え込むように、頭を少し沈めた。洋介はそれに構わず櫛を置き、彼女が首にかけているタオルを取って彼女の髪を優し

く拭いた。洋介は既視感を覚えながら、口をついて出た言葉に動揺した。
「女の子の髪の拭き方も、梳かし方も、ヘアブラシのことも、山口小夜子のことも、全て朝子に教わったんだ」
エマが振り向き、首をかしげる。洋介は、彼女が朝子のことを微塵も知らないことにやっと気づいて愕然とする。自分の中にあまりにも浸透した事柄であるだけに、誰もが知っていることのように錯覚していた。洋介は、動揺しながらも最初の言葉に引き出されるようにして続けた。
「朝子のことを、君は知らない。でも、知っておいてほしい。おれはできるだけ自分の中のことを人に話したくないけど、これから一緒に暮らす君には知っていてほしいんだ」
エマは、洋介の顔を無心にじっと見つめている。洋介は戸惑うように自分の首を掻き、頭の中にある言葉を整理して、話し出した。
「朝子は、おれの恋人なんだ。美人だよ。君と比べてどっちがきれいかな。背が高くてほっそりしている。声は明るいアルトって感じ。髪型は、出会ったときは長くて、最後に会ったときはかなり短かった。こういう外側の情報を君に与えても、君は戸惑うだけだと思う。けど、朝子のことを話すときは朝子の情報をできるだけ言いたくなるんだ。こうやって確認してるんだろうな。朝子の姿を。彼女の姿を思い出せなければ、この旅は無意味になってしまうから。朝子は、強かったよ。滅多に泣かない。彼女の十代のころを知らないけど、きっと泣かない女の子だったと思うよ。あと、何事であっても弱音を吐かない。これは困った癖だった。おれに相談をしてくれないんだ。だからあんなことになったんだと思う」
洋介は、一旦話をやめて深呼吸をした。怒りが、彼の胸の中に甦ってきたのだ。
「朝子は奴隷になった。父親の小さな工場のためにね、自分を担保にして借金したんだ。変だよな。何で朝子が？　親父が借金すればいいんだよ。それとも、家族の大部分を救うための犠牲ってやつな

のかな？　十年くらい前から、世界中で奴隷制度が流行りだした。一つの国が成功を収めれば、他の様々な国で真似しだした。この国も例外じゃない。この制度は人間を人間でなくする制度だ。人間を奴隷という道具にするんだ。でも奴隷でない側も例外じゃない。人間のくせに人間を道具として使っていくうちに、自分の中にある人間の定義が曖昧になる。だから今、街はめちゃくちゃなんだ。この好景気も、奴隷制度が始まってからしばらく続くだけの泡のようなものに違いないのに、街の、奴隷でない連中はそれに気づかず浮かれ騒いでいる。君が中川に弄ばれそうになったように、奴隷を好きにしている。金さえ持っていればいい。金を持たない奴は人間として資格がない。そういう価値観なんだよ。でも、そうかな？　いつかしっぺ返しが来るよ。見ものだな」

　エマは洋介を見ている。洋介は、彼女が奴隷制度のいけにえであることを感覚として忘れていた。話を聞いてくれる、ただの人として見ていた。

「おれは、いい大学を出て、いい会社に勤めていた、ただのサラリーマンだったんだよ。朝子は、よく行く喫茶店のウエイトレスだった。仲良くなって、恋人になって、週末にはいつも公園で会った。朝子は感性の鋭い女で、ちょっとしたことの中で気づいたことをおれに話してくれた。面白かったよ。彼女にかかると、世の中は質量が小さくなっていくように感じられるんだ。世の中は面白い、難しいことなんかないものだって思えてくる。彼女は毒舌家だった。彼女に友達が多くなかったのは仕方ないね。きついからな、言うことが。おれのこと、最初はきゅうりみたいだと思ったらしいよ。細くて頼りなさそうだってさ。今も変ってないと言ってたっけ。最後に会ったときにね。彼女、泣きもしなかった。明日、わたしは奴隷になる。そう言って終わり。おれだけがヒステリックになって、終わりだ。逃げ出す努力もしたんだよ。でも朝子のほうがおれから逃げて、期日の『明日』になる前に女衒（ぜげん）みたいなやつらに自分を引き渡して、全ては台無しになった。きっと、家族を守るためだろう。あ

んな家族、守る価値なんかないのに。彼女がいなくなると、奴らは彼女の荷物をごみとして出したんだ。奴隷の身内が恥ずかしくなったんだろうな」

洋介はまた深呼吸をした。今度は震えのある呼吸だった。

「おれは、会社をやめてあちこちを巡った。関東を最初に探して、次に関西。東北。北海道。中国。四国。で、ここ九州に転勤になった友達が、朝子を見たというからやって来た。今までは一番有力な情報だったから、おれは四ヶ月もここにいる。奴隷は決まった地域でしか買えないし、飼えないけど、それならこの街にい続ければ、彼女に会える気がする。ここは九州で最大の奴隷の街だ。いつか、必ず。買うんだよ。恋人を買うなんておかしな話だけど、そうするしかない。買って、昔のような暮らしをする。公園で、彼女の諧謔的な言葉を聞いて、おれは笑う。意地の悪い言葉を吐く彼女を、おれは諌める。それだけでいいんだよ。でもね」

エマが完全に洋介に向き直っていた。黒い瞳で、じっと見つめている。洋介は彼女の視線を浴びながら、小声でつぶやいた。

「奴隷になった彼女を、おれはまた愛せるだろうか。怖いんだよ。中川の話を聞いたり、奴隷倉庫の奴隷たちを見たりすると、怖いんだ。あんな風になった彼女に、おれは昔のように接することができるだろうかと」

エマは、ぼんやりと洋介を見つめていた。洋介は、虚ろな目つきで最後のため息をつき、エマに話してよかったのだろうかと考えた。ふと見ると、エマはまた涙を流していた。糸のように真っ直ぐに、細く落ちていく。涙の意味がわからない。自分や朝子への同情ではないように思えた。洋介は困ったようにエマの頭をぽんと叩き、

「寝ようか」

と声をかけた。

洋介が風呂から上がると、居間の隣にある仏間に敷かれた布団の中で、エマは目を開けて待っていた。洋介はふと妖しい胸騒ぎに襲われたが、伏し目がちになって笑い、

「おれは何もしないって言ってるのに」
と声に出した。エマはこくりとうなずき、今度は、目を閉じた。白い、小さな顔。幼いけれど色香の漂うこの微妙な年齢の少女と暮らすことを考えて、妙な恐れに似た何かが心中に芽生えた。この顔に口付けをしたらどうなるだろう。そう思うけれど、洋介は首を振る。それは全ての崩壊を意味した。朝子のことも、自分の矜持も、全て台無しになる。そしてエマを奴隷としてそのように扱えば、たちまち自分の中にある人間への信頼をなくす。最後には、自分が何者であるかということさえわからなくなってしまうだろう。それは、何よりも恐ろしいことだ。
「おやすみ」
そう言って洋介は襖を閉じ、居間の電灯を消して畳の上に寝た。毛布一枚で済む、心地いい涼しさだった。明日を考えるな。洋介は目を閉じたまま、自分に命じた。

4

洋介は外から帰ってくると、大きな青い紙袋を居間の隅にある衣類用のプラスチックケースの上に置いた。そして腕時計を見て、小さく笑った。そのまま、居間を出て台所に入る。作りは古いのに、電化製品ばかりが新しい四角い台所が目に入る。四人がけのテーブルの向こうに行き、棚の上の小さな炊飯器を開いて覗き込む。うなずきながら、流し台に行って手を洗った。

人参と玉葱を手馴れた様子で刻み、沸騰しただし汁の中に入れて火を弱める。ついでに電気コンロのもう片方に載ったフライパンを温め、油を敷き、溶いた卵を広げる。たんぱく質の焼ける独特の匂いと音がゆっくりと台所中に広がる。卵が固まると、洋介は冷や飯をフライパンに入れた。ついでに、醤油と味醂と塩、胡椒を。最後に刻んだねぎを混ぜ、材料を均等にするのに集中していると、後ろでガラス戸の開く、木の玉が転がるのに似た音がした。

「おはよう」

そう言ったあと、フライパンのほうの火をとめる。振り向くと、エマは長い髪をまとめて片方の肩にかけて、気まずそうに立っていた。朝だからか、昨日よりも白い唇が尖っている。多分、恥ずかしさを隠す癖なのだろう。

「十二時か。すごいな。いつもこんなに遅くまで寝てるの？」

仏頂面で首を振るエマを、洋介は面白そうに見ている。

「おれは軽く朝飯を済ませて、買い物に行って、昼飯の準備をしてる。君は？」

唇が小さく結ばれる。からかわれることが不満なのか、目は洋介をにらむようにしている。洋介はにんまりと笑い、

「顔、洗えば？　おれは味噌汁に味噌を加えなきゃ。炒飯、食べる？　君が朝起きないせいで余ったご飯で作ったんだけど」

と言った。エマはそのままの表情でうなずき、風呂場の手前にあ

る洗面所に向かった。洋介は笑顔のまま味噌をスプーンで取って濾し器に入れ、だし汁に溶かし込んだ。今日の彼は機嫌がよかった。朝は何か複雑な気持ちで目覚め、自分の昨日の行為にひどい後悔を覚えたのだが、エマが安心したように眠っていることが彼を満足させた。本当に、おれはエマを妹のように可愛がることができるかもしれない。そうしたら、朝子は見つかるだろう。根拠のない自信が芽生えてきた。おれは彼女を相変わらず愛することができるだろう。

味噌汁が沸騰する前に火をとめ、洋介は味噌汁と炒飯をそれぞれ器に入れた。そのころにはエマも戻ってきていて、昼食は穏やかに始まった。とは言っても、会話はない。洋介が一方的に話すだけだ。

「おいしいだろ」

決めつけるように洋介が笑いかけると、炒飯をスプーンですくったばかりのエマは、不満な気持ちを強調するように目を大きく開いて首を振った。

「そっか。まだ食べてないもんな」

洋介は味噌汁椀に口をつけて飲むと、

「まあ、いつもの味だな。普通の味」

とつぶやいた。エマは味噌汁を飲んで、ちょっとうなずいた。彼がそれを見咎める。

「それはどういう意味？」

エマは首をかしげる。洋介は唇を斜めにして、食事を再開する。

「食事当番だけどさ」

炒飯を口に含んだエマが顔を上げて洋介を見る。白い顔。目を見開いて、子供じみた様子で咀嚼している。顎には小さな赤いにきびがぽつりとある。それを発見して、彼は彼女のことを完全な子供ではないのだと認識して戸惑う。

「食事当番を決めよう。今日はおれが作るけど、明日は君。明後日はおれ。明々後日は君。つまり一日交代だ。いい？」

こくん、とエマはうなずいた。どうやら食べていたものは飲み込んだらしい、食べるタイミングを待っている。

「料理できる？」
うなずく。
「本当に？」
そう言ってからかうと、エマはにらむような顔をする。洋介は本心から意外に思った。
「君くらいの子は料理なんてできないものだよ。すごいね」
エマは表情を元に戻して、右手の親指と人差し指を近づける手まねをした。
「『少し』か。でもおれだって少ししか作れないから、助かるよ」
うなずいたエマを、洋介はしばらく見つめた。おかしな共同生活が始まった。その実感だけが胸にあった。エマは洋介がものを言わなくなったので、遠慮を解いて食事をまた始めた。
洗面所の鏡の前に二人で並んで歯を磨いた。何となく、エマの警戒心はまた少し和らいだように見える。このまま徐々に近づいてくるのだろうか、と洋介は思った。エマは歯には並々ならぬ執着心があるらしく、うがいのあとも念入りに鏡を見ていた。女の子は容姿にこだわるからな。そう考えて、洋介は朝子を思い出した。彼女はこれほどにあからさまなこだわりは見せなかったけれど、身奇麗さにその片鱗は見せていた。
「ああ、そう言えば」
何をすればいいのかわからないといった様子でどこか遠くを眺めているエマに、洋介は声をかけた。彼女が不思議そうな顔をする。彼は、ぶかぶかの彼の服を着ている彼女が、急に哀れになった。
「居間にある紙袋の中に、君のものがあるから着ればいいよ」
エマは目を目一杯広げた。赤さが戻ってきた唇を、何か言いたげに開く。洋介は急に恥ずかしさを覚えて、ぶっきらぼうになった。
「とにかく着れば？　今のままの格好をしていたいの？」
エマは彼のほうを見ながら廊下に出て、居間に入った。エマが居間にいる間、彼は体温が上下するような錯覚を起こしながら台所の椅子に座っていた。

居間の襖が開く。エマは顔を赤らめて出てきた。ワンピースを着ている。半袖で、白地に緑色の木の枝が印刷された生地だ。洋介には少女の洋服の趣味がわからなかったから、上下を組み合わせる服は買えなかった。だからワンピースを買ったのだが、花柄の、いかにもイメージ上の少女が着そうなものは、朝子が「馬鹿みたい」と一蹴したことを思い出したから、やめた。結果、消去法で買ったに近いのだが、エマはとても嬉しそうにしていた。洋介が嫌になるくらいに。そろそろと近づいてきて、洋介の手を取り、湿ったてのひらで包んだ。それから彼の目を輝いた目で見る。彼は思わず目をそらして、こうつぶやいた。

「君が自分で選ぶべきだけど、服を買いに行くには服が必要だっていう、ややこしい問題があってさ。気に入ってくれてよかったよ」

エマは、笑った。唇を三日月形にして。洋介は最初、そのことをそれほど重大な出来事だとは思っていなかった。しかし、エマが手を離してぬくもりが消えた途端、はっとして彼女を目で追った。彼女は居間に戻り、両手で女物の白いスニーカーを持って出てきた。また笑っている。目尻が下がって、より女性的な顔になっている。ありがとうございます。その目はそう言っている。あなたのこと、少し好きになりました。

洋介は中学生のように口ごもり、うなずくと、

「パンプスを買おうと思ったけど、サイズが合わないと辛いっていうから。スニーカー、好き？」

エマは彼を見つめながらうなずいた。笑顔は消えていない。彼はどうしようもなく動揺して、

「よかった」

とつぶやいた。

エマのものを買いに行くに当たって、彼女の髪の問題を彼女自身が指摘した。肩に流している長すぎる髪を、指差して教えたのだ。そのころには彼のうろたえ方も落ち着いてきていたが、それまでそのことに気づかないくらいではあった。彼女は髪の束を指差しなが

ら、唇をとがらせた。昨日言ったじゃないですか。髪を切ってくれるんでしょう？　前髪も、作ってくれるんでしょう？　実際、彼女は眉の辺りで手をかざして示していた。洋介はやっと気づき、うなずいた。そういえばそうだった。しかし、自分にこの子の髪を切ることができるだろうか。昨日は当然できるものだと思っていたけれど。

「切ろうか。玄関で切ればいいよ。掃除が簡単だ」

エマは早速居間に戻り、どこからか鋏を持ってきた。

「風呂敷、あるだろう？　それ持ってきて」

洋介が言うと、エマはもう一度居間に戻って青いシンプルな風呂敷を持ってきた。洋介は受け取ると、ぎこちなくエマに笑いかけた。

「これを肩にかけて、髪を切れば服にかからないから」

エマはうなずき、にっこりと笑った。

台所から椅子を持ってきて、玄関の床になっているコンクリートの上に置いた。エマはドアに向かって座る。洋介は彼女の髪を持ち上げ、一瞬見えたうなじから目をそらし、風呂敷をエマにかけて前で結び、彼女が持っていた豚毛のブラシを手に取った。これも、今日彼女のために買ってきたものだ。店員にあれこれ薦められて、違いがわからぬまま一番高いものを買ったのだった。エマの柔らかい髪を、毛先から梳かす。昨日の濡れた髪とは違って、ふわふわと、彼の手にまとわりついてくる。洋介は次第に無心になっていった。腰の位置まである髪が揺れて、洋介の足に時々触れる。それでも、頭頂の髪を梳くまで彼は何も感じなかった。耳に通した番号札が気になりはしたけれど。

鋏を手に取り、髪を切ろうとして、洋介はエマがどれくらいの長さを望んでいたか、わからなくなってしまった。小声で聞く。

「背中くらいの長さでいい？」

エマが振り返らずに小さくうなずく。洋介に全身の強張りが戻ってくる。エマの髪を切る。それだけのことがおかしなことのように思えた。

おれは、この子とは他人の関係だ。なのに、何故こんな風に彼女の髪を切るのだろう？

鋏を地面とは水平にして、真っ直ぐに切る。細かな硬い手ごたえが伝わってくる。もう一度、切る。もう一度。七回鋏を入れると、彼女の髪はすっかり短くなってしまった。それでも、きっちりと揃っていて美しい。床の上を見ると、彼女から離れ落ちた髪の毛がばらけて黒く積みあがっていて、もったいない気がした。

「次、前髪切ろうか」

洋介が言うと、エマは椅子の上で姿勢を変え、その背もたれに寄りかかって、洋介と向かい合った格好で正座をした。当たり前のような顔で目を閉じて前髪を切ってもらおうとしているのを見て、洋介は胸が苦しくなった。

おれは信用されている。どうしてだろう？

彼は戸惑いながら、前髪になる髪に青い櫛を入れると、顔の見えなくなったエマの前で鋏を入れた。真っ直ぐに。再び顔が見えてくると、彼はエマを初めて本当に美しいと思った。そうすると彼は、恐ろしくなって彼女から離れそうになった。それでも彼女は無心に彼の彼女への行為に身を任せているので、揃った前髪に丁寧に鋏を入れて毛先をばらけさせる作業に戻るしかなかった。

「終わったよ」

エマが目をぱっと見開いた。黒い瞳を見るだけで、ほっとするようだった。子供に戻った。そういう気がした。彼女は自分の周りの髪の毛を見て、彼を見上げた。ずいぶん切ったんですねえ。そう言いたげな表情で、彼女はもう一度しげしげと床を見た。

「すっきりしたね」

エマはうなずく。

「片付けて、出かけようか」

もう一度、うなずく。

彼が椅子を持って台所に行くと、エマは下駄箱に寄りかかっていた箒で髪の毛を掃いてゴミ袋に入れてしまっていた。それらが自分

の一部だったことを忘れてしまったかのように、エマは無造作にそれを床に放り出し、やれやれといった具合に玄関の上がり框に座った。洋介は自分の格好が清潔なTシャツにジーンズ姿であることを確認し、エマが小さな裸足にスニーカーを履くのを見て、外に出ればこうまで気詰まりではないだろう、と考えた。外に出れば、全てが解決するだろう、と。

5

「番号札、外そうか」
洋介が玄関の中で声をかけると、準備万端で出かけようとしていたエマは困った顔をした。そして目で話しかけてきた。番号札は奴隷の証です。外したら大変なことになるんじゃありませんか？
「何となく、不愉快だからさ」
エマは彼の顔をじっと見つめる。でも、いけないことでしょう？
あなたが罰を受けるのでしょう？
洋介はその視線を浴びて少し考え込み、自分にはエマの番号札を外す勇気すらないことに気づいた。情けないが、それが事実だ。怒りに任せてエマを買ったときなら、外すことができたかもしれない。しかし今はその怒りも沈静化していた。後々面倒なことになるのなら、今でなくてもいいだろう。エマだって特に望んでいない。彼はそうやって自分を納得させた。
「じゃあ、行こうか」
彼は番号札のことなど忘れたふりをして、エマを先に外へと出した。自らも玄関から出ると、ああ、秋だな、と思った。
狭い庭に生えている草はまだ青々としているけれど、盛んに繁るときは過ぎた。陽炎さえ見えていた夏がここにあったとは信じられないほどに、空気は柔らかく、心地よかった。空は薄い青色をしていて、雲も夏の時期のそれとは比べ物にならないほどたおやかな感じがする。エマは少し嬉しそうに頬を赤らめていた。彼女もまた家の中が気詰まりだったのだろう。
古びて苔さえ生えたブロック塀の向こう側に、一人の老人の姿が見えた。よく見かける、近所の住人だ。
「こんにちは」
洋介が挨拶をすると、老人はたるんだ顔を思い切りしかめて唾を地面に吐きつけた。

「今時の連中は変やと思わんか」
「え？」
洋介は困惑した。老人はいつもならば洋介に軽い挨拶くらいなら返してくれる。しかし今は怒っているようなのだ。
「この街ば赤線地帯にしよった。おかしかと思わんか。取り締まる法律のあったとに忘れたとかね」
赤線とは、懐かしい言葉だ。洋介には遊郭という、より古い言葉のほうが親しみやすい。そのため、頭の中での変換が必要になる。老人はどうやらこの街が売春婦の街になったことを怒っているらしい。しかし、何故、今。
「あんたもその娘ば買ったとやろ？　番号札の（が）見える。奴隷奴隷て言うけど、売春婦と同じぞ。まあ奴隷のほうがあからさまやね。あんたら若者は恥さらしぞ。恥を知れ」
老人はもう一度唾を吐いた。洋介は怒りがこみ上げてくるのを覚えたが、こらえた。ゆっくりと答える。
「ぼくは、この子を妹として育てる気でいます。買ったけれど、そういう目的ではなくて」
「人間ば買うということはその人間より優位に立つことぞ。あんたがその娘ば買ったら、娘はあんたに全てを与えるまで世間から許されん。そのことがわからんとなら、あんたがどがんつもりでも、おいは信用できんな」
「ぼくは絶対そんなことはしません」
洋介は少し早口になっていた。エマが心配そうに二人を見ている。老人は小さな落ち窪んだ目を洋介に向けて、声を震わせて捨て台詞を吐いた。
「金で人間ば買った。それがどれだけ恐ろしかことか、あんたには一生わからんとやろうな」
洋介は一歩踏み出して何かを怒鳴ろうとしたが、エマが彼の腕をそっと掴んだのでそれに気を取られて何も言えなくなった。老人は洋介とエマを一瞥したあと、またゆっくりと歩き出し、洋介が言い

返す言葉を口に出したときにはもう見えなくなっていた。
「くそじじい」
幼稚な罵倒語だと思ったが、自らの気分を落ち着かせるためには言わなければ気がすまなかった。エマは老人に聞かれたかどうかを気にしていたが、その心配がないことを知ると、今度は洋介を見た。喧嘩はやめてください。怖いです。そう訴えかける。
洋介はそんなエマの様子に不快感さえ覚えたが、彼女は争いを好まぬ性格なのだと考えると、悪いことをした気がした。同時に、何か不安を覚えた。
「とにかくさ、行こう」
エマの前を歩き始めると、エマは洋介の横についてきた。少し間隔のある、他人の距離。この距離感を維持すべきなのかそれとも二人はより近づくべきなのか、洋介は迷った。
街に出ると、洋介はまず花屋に寄った。美奈は家族で営んでいる小さな花屋で、今日も手を真っ赤にして花の整理をしていた。洋介が声をかけると、美奈は一瞬嬉しそうな顔をして、エマを見てから真顔になった。そっけない態度で花のほうを向く。
「今一番きれいな花って何？」
「花はみんなきれいですよ」
美奈は固い表情でエマを見る。エマは少し怖がるように離れて立っている。
「そうじゃなくて、一番旬の、一番お薦めの花」
「マーガレットならそうだと思いますけど。でも今時の花は温室で咲くから、旬なんてものはないも同じやと思います」
「そうなんだ。じゃあ、マーガレットを買おうか。ほら、あの円くて白いやつ」
洋介はエマに向かって笑いかけた。それを見てから、美奈は洋介に背中を向けた。洋介はマーガレットの数を確認してから、
「夕方、来るよ」
と声をかけて店の前を通りすぎた。エマがついて来ながら戸惑っ

た表情を見せる。あの人は、どうしてあんな風なんでしょう？　わたし、怖いです。
　洋介はアスファルトの道をシンプルなスニーカーでゆっくり歩きながら、エマの顔を見下ろしていた。
「多分、君に嫉妬してるんだな。君が奴隷ってだけで、想像することは皆同じだ。美奈さんは、おれのことを好きみたいなんだ。でも、おれは彼女のことを何とも思っちゃいないから、どうしようもない。彼女はきれいじゃないから。だからこれからも今までどおり接するよ。どうせ君とおれとは本当に何でもないんだし。堂々とすればいいんだ」
　エマは考え込むような顔をする。洋介はそれをからかうように、
「君はいつも何を考えてるのかな。深くものを考えたりするのかな」
　と笑うと、彼女は唇をとがらせた。少しずつ、彼女は表情が豊かになってきていた。笑ったり、眉をひそめたり。彼はそれを愛らしいと思った。子供じみた仕草であるほど、不思議な安心感を得た。
　二人が背の低い雑多なビル群の立ち並ぶ街を進み、多くの奴隷を含む人々と通りすがると、遠くからも見えていた大きなビルが見えてきた。あのガラス張りのような建物は、この街で有数のファッションビルなのだ。エマの目が明るくなる。全国的に有名なこのビルの名前は、エマのいた街にも届いていたのだろうか。そもそも、エマのいた街とはどこなのだろう。
「朝はおれ一人であそこに入ったんだよ。すごく恥ずかしかった」
　エマがにっこり笑う。
「何でも買うわけにはいかないけど、当面いるものなら買うよ」
　うなずいて、もう一度ビルを見る。
「半袖の服、長袖の服。あ、そうか。下着もいるね。さすがに下着は一人で買ってくれよ」
　エマが、そんなことまで言わなくていいです、という顔で洋介を見る。彼は目をそらしてうなずいて、本当に言わなければよかったと思った。

ビルに入ると、照明が明るすぎるのかきらきらと辺りが輝いていて、二度目ではあるが、洋介は目がちかちかした。エマは興奮気味にさまざまな店を見回して、本当にいいんですか？　という困ったような顔をして首をかしげた。洋介はうなずく。

「無駄なものじゃないんならね」

一階では下着や靴下を買い、上の数階では様々な洋服を買った。花柄のワンピースを買わなかった洋介の判断は正しかったらしい。エマは少女らしい服を買わなかった。水色の無地のTシャツやデニム生地のショートパンツなどを選んだのだ。街を行く少女はもっと着飾っているのに、と思っても、エマはそのような服が好きらしい。

一度、店員の冷ややかな視線を浴びた気がした。エマの耳の番号札は長い髪に隠れて見えないのだが、ふとしたときに透けて見える。服を見るエマのほうを、店員の若い女性は汚いものを見るような目で見、同時に洋介を一種の奇妙な目で観察した。いたたまれなくてエマを連れ出すと、彼女はわかっていたらしい顔をした。わたしは、悲しいです。そう言っているように見えた。洋介は自分の先程の行動とは矛盾していると知りながらも、堂々としていればいいんだよ、と諭した。それでもエマはうなだれている。だから彼は彼女の持っている紙袋を持ってやり、共に一階に降りた。

探していた店は、すぐに見つかった。洋介はその店に入ると、少し考え込んでから商品を選び、あっという間に会計を済ませた。店を出ると、エマが驚いた顔をして待っていた。

「これ、あげる」

彼が押し付けたクリーム色のビニール袋を開いて覗き、エマは目を輝かせた。嬉しいです、と訴えてくるその目を見ると、洋介は心がとろけていく気がした。

エマが袋から出して持っていたのは、口紅とマニキュアだった。口紅は銀色の土台に淡いピンク色の棒紅がはめ込まれているのが透けて見える作りだ。マニキュアもシンプルな瓶に入っている。真珠のような白い色。

エマが近寄ってくる。思ったよりもそばに。そうして、とうとう洋介に触れた。エマは洋介の左腕を取り、抱きついた。洋介はどぎまぎしながら、その柔らかで温かな体をそのままにした。エマは動かずに洋介を見上げた。少し照れたように微笑んでいる。彼はどうしていいのかわからず、とうとう彼女から離れた。

「人が見てる」

そう言うと、エマが悲しそうに首をかしげた。

「喫茶店に行こうか」

唐突だとは思ったが、気持ちを落ち着けるにはそうするしかないと思った。

ビルを出て、大型チェーンのコーヒーショップに入った。四角いテーブルが整然と並んでいて、人で一杯だ。先程のファッションビルと比べると、若い女性が少ない。だから、自然と奴隷を連れた富裕層もいくらかは混ざりこんでいる。洋介は中年女性が彼女より少し若いくらいの女奴隷を連れて座っている席のすぐそばにしか座れないことに気づいた。苦々しい思いでいたが、ここで躊躇していてはこの先もどうにもならないのだと考えて、そこを選んだ。

女奴隷は洒落たブランド物の首輪をつけて立っていた。清潔そうな格好をしていたが、主人と比べると格段に劣った格好をしている。主人である女は全身を上等の服で固め、文庫本を読んでいる。洋介は気にしないことを決意して、エマと向かい合って座った。

「結構買ったね。この紙袋、相当重いよ。中が衣類だと思えばね」

エマは先程からとても機嫌がいい。彼の言うこと全てに笑顔で答える。

「君は買い物が好き？　女の子は皆そうなのかな」

エマが考え込んでから浅くうなずく。

「少し好きってこと？　まあ、そうかもしれないね。朝子もそんな風だった。やたらに買い物をしたがる女は頭が軽いってさ」

洋介が声を出して小さく笑うと、エマがどっちつかずの顔をした。多分、朝子の毒舌に賛成すべきか反対すべきか迷ったのだろう。

「朝子ってね、すごく口が悪いんだよ。一緒にスーパーで買い物をしてるとき、床に寝転がって足をばたばたさせて、何かを買ってくれって母親に向かって泣いてる男の子がいたんだけどね。そりゃあひどいもんだよ。壊れた機械みたいなきいきい声で叫ぶんだ。おれも困ってたけど、まあ他人の子だからなと思ってほったらかしにしてた。でも朝子は違った。子供のところにつかつか行って、うるさい！　って怒鳴るんだ。辺りがしいんと静まり返ったね。子供も泣きやんで朝子を見た。おれははらはらした。子供の母親が、すごく険悪な顔をしてたからね。でも、朝子はそれに構わず、親ならどうにかしなさいよ、恥知らず！　って、今度は母親に怒ったんだ。母親は黙ったまま、男の子を引っ張ってスーパーを出てった。男の子は素直についていったよ。きっと、ほしかったお菓子だかおもちゃだかのことなんて、忘れちゃったんだろうな。あとで朝子はこう言ったよ。あんな恥ずかしいこと、わたしが親なら絶対させないのにって」

エマは真顔になって洋介を見つめていた。洋介はそれを見て、笑った。

「朝子と結婚してたら、どうなってたんだろうな」

うつむいたエマは、手まぜをした。何かを言いたくて、言えない顔だ。

「おれの話ばっかりだね。君は、どこから来たの？　どこに住んでたのかな。言いたくないならいいんだ。言いたいときに教えてくれれば」

「気持ち悪い」

低い女の声に、洋介とエマははっと顔を上げた。エマのすぐ斜め後ろの席にいる、奴隷を連れた女が洋介をにらんでいた。訛りのない言葉を放り投げるようにして、女は声を張り上げた。

「奴隷相手に話しかけるなんて気持ち悪い。独り言みたいなものじゃない」

洋介は言い返そうと立ち上がったが、店内の人々の好奇の目に囲

まれていることに気づき、黙り込んだ。エマが彼のほうをじっと見ていた。帰りましょう。そういう目だった。彼は唇を噛んで紙袋を掴むと、エマの手を引いて店内をつかつかと歩いた。騒がしかった店の中は怖いほど静かで、彼は外に出るまで居心地の悪さを感じた。

「ごめん」

家に向かって歩く道で、洋介はエマに謝った。街は昨日の帰り道よりはずっと明るく、人も少なかった。

「おれはもっと堂々とするべきなのに」

このようなことが、エマを連れている限り起こりうるのだと考えると、暗澹とした気分になった。いっそこの番号札を外すことができたら。そう考えて、エマを売るという選択肢を思い浮かべていない自分に安心した。

エマはうなだれて歩いていた。化粧品の入った袋を、相変わらず大切そうに持っている。洋介は先程訊こうと思っていたことを思い出した。

エマがどういう風に育ったのか、知りたかった。決して本気で怒ることのない行き過ぎたまでの平和主義はどこから来るのか、それが訊きたかった。彼女はきっと幸せな育ちではないだろう。だから本当に訊くのはためらわれた。

「家に帰ったらさ、口紅とマニキュア、つけてみるといいよ」

代わりにそう声をかけると、エマは彼を見上げて、ありがとうございます、と目で答えた。ありがとうございます。あなたのこと、今は結構好きです。

洋介はうなずき、いつの間にか美奈の花屋に着いたことに気づいて、仏頂面の美奈からマーガレットの花束を買った。花束がエマの手に渡されるときの美奈の目には気づいていたが、彼はあまり気にしないようにした。

6

家に着き、エマはやはり戸惑う様子で玄関をくぐった。洋介はそれを見ても昨日ほどは不快ではなかった。彼女が怯えるのも不思議はない、と思った。彼は彼のことも信用できないのだから。これから夕食を取ったり風呂に入ったり眠ったりすることを、一つ屋根の下で行うのだ。誰も守ってくれない。彼女を彼から守るべき人間がいるとしたら、彼だけなのだ。一人のときは何も感じなかったこの家に、彼は息苦しささえ感じた。

彼女を本当の奴隷にしてしまうことが彼の最後の砦を壊すことだと、彼は思った。本当の奴隷にするというのは、彼女の柔らかで滑らかな肌を、自分のものにすることだ。それはしようと思えばいつでもできた。難しいことではない。自分のイメージする「人間」を諦めたときに、それは可能となる。だが、しない。人間でありたいからだ。朝子のこともあるが、一番の理由はそれだった。

花束と化粧品の入った袋を持ったまま、彼女は居心地が悪そうに立っている。彼がスニーカーの紐を解く間、彼女は唇を小さく結んでそれらを見ていた。彼は何気なく、彼女のひざを見つめた。丸くて小さなひざだ。華奢な体に似合っている。ワンピースの裾からこちらを覗き見ているようだ。しかし、どきりとして、視線を送るのをやめた。何か悪いことをしているような気がした。

洋介が上がると、エマは簡単に靴を脱いでついてきた。彼が居間に入ると彼女は台所に行く。マーガレットの花束を背の高いコップに生けてから、彼女は居間へと持ってきた。彼と彼女はちゃぶ台の上で無邪気に咲くその白い花を見つめる。そして気詰まりなときが訪れる。

「どうも、よくないね」

彼が正直につぶやくと、彼女は首をかしげた。

「君と二人きりというのは、何だか変だよ。今更だけど」

彼女はぼんやりと彼を見て、物思いにふけるようにうつむいた。彼は大きくため息をついて、うなずいた。
「慣れの問題かな。そうだよ」
そうではないことは、自分でわかっていた。しかし、彼は彼女の前ではそういうことにしておこうという気になったのだ。彼女が安心して暮らせるよう。朝子はこのことを知ったらどう思うだろうか。彼女ならどうするだろう。そもそも朝子はエマを気に入るだろうか。朝子は人間の好き嫌いがはっきりしていたから。
考え事が馬鹿馬鹿しくなって、彼はエマに向き直った。エマはちゃぶ台の隅に化粧品を立てて眺めていた。あからさまではないが至極嬉しそうなその表情に、洋介は思わず笑みを浮かべた。
「女の子は化粧品が好きだね」
声をかけると、彼女は顔を上げる。白い歯を見せて笑い、また口を閉じる。
「化粧品を持つのは初めて？」
こくりとうなずく。
「じゃあ、おれも悪いことをしたね」
首をかしげて彼を見つめる。
「女性は化粧しないほうが、おれは好きだからさ。化粧するタイミングを自ら与えて、おれも馬鹿だね」
彼女はにこにこと笑って応えた。
彼は彼女相手にどうでもいい話をし、時間が来ると彼女を連れて近所のスーパーマーケットに行った。外の空気を吸うと、やはりくつろいだ気分になった。あの気詰まりな感じ。あれが幾度も繰り返されるのか。そう思うと、気が重くなった。
適当に買い物を済ませ、家に帰り、また少し緊張して夕食を作って食べた。それが終わると歯を磨いて、彼、彼女の順で風呂に入る。
彼女が風呂に入っている間、彼はただ黙ってパソコンの画面を眺めていた。インターネット上のニュースを見ても、世の中は何も変わっていなかった。世の中は刻一刻と変わるものだ。それが、何の

変化も見られない。有名女優がやはり有名なミュージシャンと離婚した。どこかの田舎で陰惨な殺人事件が起きた。海外のある国で仕事のない若者たちのデモが行われた。どれもこれも、総体的に見れば何も変化のない相も変わらずのニュースだ。奴隷制度は安定している。まるで遥か昔から存在していたかのように。洋介自身、奴隷制度がなくなるというイメージを描くのが困難だった。願ってはいるつもりだったけれど。

襖が開いて、エマが居間に入ってきた。今日買った水色のパジャマを着ている。パソコンの画面を覗き込む。洋介ははっとして画面を体で隠し、インターネット回線を切る。エマは首をかしげ、不思議そうな顔をする。

「髪、梳かそうか」

ごまかすように出てきた言葉に驚きながら、洋介は青い櫛を手に取った。エマは目を丸くし、それでも彼の行動に逆らわない。それは二人の関係に波風を立てないようにするためであるようだった。彼は彼女を畳の上に座らせてその後ろであぐらをかき、濡れた髪を梳かした。どうしてだろう、と思いながら。

「君の髪は、どうも梳かしたくなるね」

彼女の顔はよく見えない。黒くて丸い頭が見えるだけだ。

「女の子の長い髪って、十代のころは触りたくて仕方なかったけどさ」

彼女が不意に小さく振り向く。

「でも今となれば何ともないね」

また頭が正面を向く。

「でも君の髪は触れたいと思うよ」

水気を含んだ柔らかな髪は、彼の手の甲に絡みつくように流れる。水がぽたぽたと落ちる。彼は彼女から取り上げたタオルで、そっと拭く。

「終わり」

彼が立ち上がって宣言すると、エマはちゃぶ台の向こう側に這っ

ていって、ちょこんと座った。その笑わない顔は、ありがとうございます、と、もう結構です、のどちらかの意味だと思ったのだが、彼にはよくわからなかった。

彼女はひたすらにちゃぶ台の上を見つめていた。花を見つめている、と思っていたのだが、実際はマニキュアをにらむようにしていた。彼は、彼女がマニキュアを塗りたがっていることに気づいたが、あえて放っておいた。閉じたノートパソコンをじっと見る。銀色の外装に、彼女の黒い頭が揺らめいて映っている。

「マニキュアはね」

彼が言葉を発すると、彼女はぱっと顔を上げた。明るい表情だ。

「マニキュアは下手に塗るとむらになる。おれが塗る」

また何を言っているんだろう、と彼は自分に呆れる。マニキュアくらい、彼女が自分で塗れるだろうに。

しかし彼の指はマニキュアをつまみ上げ、彼の目の前で瓶を振った。あまり固くないマニキュアらしい。ちゃぷちゃぷと動いた。彼女はそれを不安そうな目で見ている。彼はちょっと笑って、

「足、出して」

と言った。彼女は一瞬ためらったが、ちゃぶ台から少し離れた位置に腰を下ろし、両足を伸ばした。彼はこのパジャマが彼女のひざ小僧を隠してしまっていることに不満を覚えた。形の隠れた足。しかし足の指からかかとまでならよく見えた。滑らかな肌と、淡いピンク色の爪。一枚も、欠けていない。

彼はそれらに無関心であるかのようにふるまって、マニキュアの蓋を外した。つんとシンナーのような匂いが鼻につく。蓋についた筆から余分な液体を落として、彼女の足に近づけた。親指の爪に筆を乗せると、彼女は一瞬身を引きそうになった。多分冷たかったんだろうな、と彼は冷静に思う。彼女の足に、彼は覆いかぶさるようにしてマニキュアを塗った。彼は慣れていた。真っ直ぐに、筆跡をつけることなく塗ることができた。左足が済むと、次は右足。右足が済むと左手、さらに右手。足に塗っていたときは何となくおかし

な気分だったのだが、手のときは何ともなかった。何度も無意識につないだ手であったからかもしれないし、少し荒れた手だからかもしれない。手は少しざらざらした。

終わると、白い真珠貝のような色になった爪を、彼女は眺めた。それから彼を見て、ちょっとだけ笑った。お義理でお礼を言っているような感じだった。彼はそれを見ても何とも思わなかった。ただ、自分でもよくわからないままに、このマニキュアが剥がれてしまったら、また塗ろうと思った。

また手持ち無沙汰な沈黙が訪れる。彼は考え事をしていたし、彼女は爪を乾かしていた。彼は彼女をちらりと見た。十代の少女。どう見てもおかしな状況だと思った。彼は、十代のころ、自分が少女とまともに話せなかったことを思い出した。話さなければならないような状況になったら、口ごもったり早口になったりした。それを見て、少女たちは、どんな種類の少女であっても彼をあざ笑った。彼はそのとき湧いた自分の一時的な女性嫌悪を、生涯つきまとうものであるかのように思い込んだ。しかし朝子は彼の二番目の恋人で、そのころには彼もかなり女性慣れしていた。それでも、十代の少女は、相変わらず苦手な存在だったはずだ。

彼はエマをじっと見た。どう見ても十代の少女だ。しかし彼は彼女と一緒に暮らし始め、髪を梳いたり爪を塗ったりしている。彼自ら。おかしなことになっている。彼自身が招いたこの状況を彼は一見嬉々として受け入れている。このままどうなるのだろう。自分を制御しながら、彼女を保護し続けるのだろうか？

彼女が、ふと顔を上げた。彼に笑いかける。手の指を見せてもう片方の指で爪をつつく。乾きましたよ。彼女は嬉しそうだった。きれいです。

彼も笑った。そして、エマはどんどん慣れていくのだろうな、と思った。彼女は彼が自制していることに気づかず、彼を安全な動物だと信じて、この戯れのような笑顔を浮かべるのだろう。美しい笑みではあったが、白痴的でもあった。朝子が嫌う、女性の笑顔だ。

「女は慣れる生き物なんだよ」と彼女は言った。「どんな最低な環境にも慣れる」と。彼女はそれを軽蔑していた。彼は自分が崇拝していた朝子が嫌う性質を備え持つエマと暮らしていることが、不思議でならなかった。

しかし、愛らしく思うのは確かだった。

「エマ」

彼が声をかけると、エマは笑顔のまま彼を見た。

「どこか行こうか」

どこに？　その目が語る。

「海に行こう」

途端に、エマの表情が曇った。彼はどきりとして、どんなまずいことを言ったのだろうと考えた。海に行こう。ただそれだけの言葉だ。それなのに、何故。

「海は嫌？」

彼女はうなだれるようにしてうなずいた。

「山は？」

首を振る。

「じゃあ、どこがいい？」

彼女は顔を上げ、今にも泣きそうな顔をして、首を振った。どこにも行かなくていいです。

彼は考え込み、

「そうか」

と答えた。それはわかったふりにしかすぎなかった。

7

洋介とエマの暮らしはそうして始まった。

朝、起きてどちらかが朝食を作って、一緒に食べる。一緒に歯を磨く。洋介がインターネットで調べ物をしているとき、彼女は一人で退屈そうにしている。昼食。歯磨き。そのあとは、外に出かけることもある。彼一人の場合があり、彼と彼女の両方の場合もある。彼女一人のときはない。出かける先は、両方の場合はスーパーマーケットや川べりや本屋、彼一人の場合は意味のない放浪だった。

彼はこういうとき、朝子を探しているつもりでいたが、実際はまともにものを見ていなかった。街の人々や奴隷たちを眺めながら、あの中に朝子がいたら、と想像をたくましくする程度だ。果ては薄暗い昼のラブホテル街に入り込み、この中に朝子が連れ込まれていたら、と考えて、絶望する有様だった。彼の頼みの綱は奴隷倉庫に並べられる奴隷たちであり、それらは毎月一日にしか見ることができなかった。奴隷が新しく仕入れられるのは一日のみだからだ。彼はその日を待ちわびながら、街をさまよう。

エマと二人で出かけるときは、幾分気楽であるように思う。エマは彼にくっついて、嬉しそうに歩く。家の中には何もない。退屈に違いない。だから彼は、彼女に本を買い与える。彼のノートパソコンを使わせる手もあるが、それだとインターネット上のありとあらゆる情報が、彼女を串刺しにしそうだった。

彼女は本というものをあまり手にしたことがなかったらしい。不思議そうに、漫画や小説を手に取った。彼女が選んだのは、彼には馬鹿馬鹿しく思える類のものばかりだ。ちらりと読んでみても、甘ったるさや感傷が、ページから匂ってくる。それでも彼女は初めて文明に触れた未開人のように、それらを摂取していった。漫画に関しては、表紙の非現実的な絵柄の少女より、彼女のほうがよほど少女らしいように思えたが、彼女にとってはそうでもないらしい。漫

画や小説を読むとき、彼女はとても真剣だった。
帰ると、夕食、歯磨き、風呂だ。風呂に入る順番はいい加減だけれど、彼女の風呂上りの習慣は変わらない。彼に髪を梳いてもらい、彼に爪を塗ってもらうのだ。彼は彼女の髪と爪に執着していた。髪と違って爪は早く伸びるけれど、彼は彼女の爪を切るのも、除光液でマニキュアを剥がすのも、新しくマニキュアを塗るのも自分の仕事だと心得ていた。彼女のほうもその習慣にすっかり慣れて、彼が彼女の足に覆いかぶさっている間、あくびをかみ殺したりもした。マニキュアは近所のドラッグストアで数種類買い集められている。赤、青、黄、紫、緑、橙、黒。最初の白を加えると、八種類のマニキュアがあることになる。彼は自分の気分次第に、彼女の爪の色を変えた。彼女の爪は、少しずつ、健康を失うようだった。髪を梳かす習慣は、朝と昼は彼女のものだったが、夜の濡れた髪だけは、彼のものだ。彼は彼女の黒すぎるまでに黒い、猫毛ぎみの髪をそっと梳かした。欠点が見当たらないか、いちいち調べた。
彼女の髪が乾くころ、二人は隣り合った別々の部屋で寝る。彼は居間に、彼女は仏間に。二人とも静かだ。彼女のほうは最初、眠れない日々が続いたようだが、今では彼より寝つきがいい。彼は、最近になってからため息をつきながら体を起こすことが多い。そしてこう考えている。おれは何をしているんだ。
全てが遅々として進まないという気がする。自分がやっていることが手ぬるいと思う。インターネットで闇取引される女奴隷の、生々しい裸体写真を見てどうなる？　殺された奴隷たちを朝子に重ね合わせてみて、どうなる？　街に彼女の姿を探してどうなる？　全ては不確実だ。彼は一歩踏み出すことをいつもためらっている。いつでも制度内で処理しようとする。これは朝子から呆れられた、彼の性質だった。それなのに、朝子のために費やす時間の他に、エマと戯れる時間があるのだ。これは、明らかに無駄だ。
しかし、彼はエマを放り出せない。エマが哀れだというだけではない。エマを売るのが悪であるならば、手段はあるのだ。彼はエマ

に吸い寄せられているのだ。彼女の持つ、体の華奢さだとか、肌の滑らかさだとか、丸いひざ小僧だとか、子犬のような目だとか、花弁のような唇だとか、黒い、どこまでも黒い長い髪だとか、伸びていく爪に。そして彼女の中にある、少女らしさに。白痴的な信じやすさや感じやすさに。彼女は彼が十代のときに追い求めていた少女とは違う。あれらはもっと生々しかった。エマは脆い。焼いた人骨のように、触れてしまった次の瞬間にはほろほろと崩れ落ちそうだった。彼はその脆さに飲み込まれつつあったのだ。

彼女の癖で、彼が未だに慣れないものがある。

初めて本を買い与えた日のことだ。彼女は十代の少女が好みそうな少女漫画を熱心に読んだ。彼が声をかけてもなかなか気づかないほどだ。だから彼女を放っておいたのだが、しばらく経ってインターネットを見ている彼の右腕に、温かな湿り気を帯びたものがまとわりついた。ぎょっとして振り向くと、彼女だった。彼女は彼の腕にからみつき、涙ぐんだ目と微笑んだ口元を向けていた。

「何？」

動転した彼が乱暴に訊くと、彼女はさっきまで自身がいた場所を指差した。そこにあったのは、漫画の山だ。彼女はにっこり笑って彼を見ながら、それらを示した。つまりは、こう言いたいのだろう。あれ、とても面白かったです。買ってくれてありがとうございます。

彼にとってはインターネットの世界から引きずり出されてこのような驚きを与えられ、更には奇妙な恐怖感も手伝って、不愉快だった。彼はそのとき、彼女から乱暴に自分の腕を引き抜いた。彼女はふるい落とされた手を持て余すようにぱたんとひざに落とし、切なげな顔をした。彼は罪悪感を覚えたが、

「忙しいから」

と簡単な言い訳をしたあとは、無言だった。

これが繰り返されたのだ。しかも、何度も何度も。新しい本を与えたとき、小川にきれいな白鷺がいたとき、空が茜色に染まったとき、彼が彼女にふと笑いかけたとき。彼女は全てが嬉しいようだっ

た。嬉しいと彼に擦り寄るのだ。それはすっかり馴れた小さな動物のようでもあった。彼は最初、ぶっきらぼうに離れていたが、次第に諦めて何もしなくなった。されるがままになる。右腕の横は彼女の占有席だった。彼女はいつもそこにいて、気分が高まると腕に飛びついた。彼女の体温や速い心臓の音が伝わってくる。彼は居心地の悪さに、どうしようもなく戸惑っている。

彼は彼女の明るい面や、弱い面しか見たことがない。笑ったり泣いたりするところしか、彼女は見せない。ただ、一度だけ驚いたことがある。

ドラッグストアで、風船のセットを買った。彼女のマニキュアほどに色とりどりの風船だ。彼女が欲しがるし、それは極めて安価であるしで、彼は特に気にすることなくそれをレジに通した。

家に帰ると、彼女は早速風船を膨らませ始めた。最初の一つを膨らませ、酸欠気味になる。それを見た彼が、手助けをして一緒に膨らませる。彼女が一心になって次々に風船を丸くするので、彼は戸惑いつつも従った。彼自身もかなり疲れたころに、彼女はどこからか持ってきた黒い油性マジックで、風船に落書きをした。顔を書いているようだった。簡略化された目と口と髪の毛だけの顔で、全部同じように見えるけれど、しわの有無や髪形が違った。彼女は八つほどある風船全てに顔を書き、ぽんぽんと空中に浮かべて楽しそうに遊んでいたが、不意に無表情になった。彼が、どうしたのだろう、と思っているうちに、彼女は台所に走っていき、何かを持って戻ってきた。風船の一つを捕まえ、こぶしを振り下ろす。ぱん、と風船は驚くような耳障りな音を立てて割れた。残骸が重力に従って落ちる。彼女は爪楊枝を握っているらしかった。また風船を捕らえ、爪楊枝を刺す。ぱん。風船が割れる。彼は何か不安になり、彼女に近寄って話しかけた。

「何してるの。せっかく膨らませたんだろ」

彼女は相変わらずの表情のまま、彼を見ずに風船を割った。そして、そのまま黙っている彼の前で、八つの風船を全て割ってしまっ

た。彼女はそのあとも、彼が凍りつくような冷たい表情を顔に浮かべながらうずくまっていた。
彼女との暮らしは、戸惑いの連続だ。彼は、自分の立場が時折わからなくなる。恋人である朝子を探す男。これはわかりやすい。奴隷であるエマを買って育てている男。こう考えるとわからなくなる。その二つが同時に彼に重なっていると思うと、更にわからない。
気の滅入ることに、外に出たときの人々の目は、更に厳しくなっていた。彼らが決まった場所に現れるために、あるいはエマの耳にある番号札のために、彼らは噂になっていた。
「困ったね」
彼がつぶやくと、彼女は彼の顔を見上げる。
「ずっと見られてる」
こうしたブロック塀とトタンの壁の地区では、奴隷を飼う人間が珍しい。昔からいる人々は、奴隷が近くにいること自体を嫌悪していたりする。だから、ちょっとした視線が意味ありげだし、中には彼らが近づいてから遠ざかるまで見つめていたりする者もいる。今日彼らを見つめているのは、ブロック塀に挟まれた道の真ん中に立っている、小学生くらいの男の子だった。子供の目は、あからさまだ。彼らのことを悪だと教えられ続けた結果の怒りを直接的にぶつけてくる。洋介はそれに参ったし、エマもそうだった。振り向いて何かくどくど言おうかと洋介は思ったが、この間の老人の件を思い出して、やめた。
「歩いていくしかないよ」
彼は彼女の手を握り、できるだけゆっくりと歩き始めた。どうしてですか？　という彼女の目。
「いいんだよ。勝手に言わせておけばいいんだ」
そう答えると、彼は子供の前を通った。
「売女（ばいた）」
子供は言った。
すっかりしょげ返ったエマを、彼もまた落ち込んだ気分で連れて

歩いた。街に出ると、視線は気にならなくなる。ビルの間をするすると歩く人々の横に、首輪をつけた奴隷がつき従っているからだ。彼は一瞬ほっとした自分を叱りつけた。この、奴隷が当たり前にいる状況を認めるとはどういうことだ、と彼は怒った。その途端、つないでいた手が引っ張られた。見下ろすと、エマが彼を見つめている。怒らないでください。

「怒るよ」

彼はつぶやき、はっと辺りを見た。見られていない。

「君は平和主義がすぎる」

彼女は困った顔をする。彼は、厳しい表情を解いて、

「怒るのは自然な感情なんだ。怒ることを制御されたらおれは破裂するよ」

とため息をついた。彼女がわかっていないような顔をしたので、何か例えを考えているうちに、声がぶつけられた。

「奴隷ば連れて散歩ですか。楽しそうですね」

振り向くと、美奈だった。彼のほうに無感情に見える顔を向けて、立っている。背後に見える花は、この間とはまた違う色彩を彼に見せていた。

「あ、着いた」

「着いたって、ここに来るつもりで来たとですか」

「そうだよ」

一瞬、美奈の顔はほころんだように見えた。しかしまた元に戻って、不機嫌な声を上げる。

「この間の花が枯れたとですか」

「うん。結構前になるね」

彼がエマを見ると、エマは慎重にうなずく。

「殺風景な生活だからね。花がほしいんだよ」

「殺風景な生活？」

美奈の顔が、嘲笑に歪んだ。彼はどきりとしたが、すぐに自分をつくろって笑顔を作った。

「君が何を想像してるか、よくわかる。そういうの、やめてもらえないかな」
美奈がさっと青ざめる。
「どういうことですか」
「おれとエマのことを、勝手に想像しないでくれ」
「だって本当のことじゃなかですか」
声を荒げた美奈を、奥にいた彼女の両親が見る。途方に暮れた表情。
「違うよ。君の考えていることは、間違いだ。だから」
「花がほしかとなら別の花屋で買ってください」
やや落ち着いた声で、美奈がつぶやいた。自制心の強い女だ、と彼は思う。このまま彼女の勝手な想像も封じ込めてくれたらいいのに。
「そうか。じゃあ、そうする」
彼はエマを連れ、歩き出した。エマは戸惑い気味に彼を見上げる。可哀想です。あの人、可哀想です。
「大丈夫だよ、エマ。彼女は強いから、すぐに許してくれるよ。花だって、いつか売ってくれる。気にするな」
それでもエマは後ろを気にした。彼もそれに倣って振り向いてみたけれど、道際に、美奈はいなかった。
「平気だよ」
そうつぶやく彼を、エマは心配そうな顔で見つめた。

8

洋介は、朝子のことをよく考えている。

今日はエマが食事を作る日だ。彼女は手際よく魚を焼き、卵焼きを作った。彼がいつも不思議な味がするような気がする、醤油入りの卵焼きだ。更に、彼にとっては味が濃すぎるように思う味噌汁も。ぼんやりとテーブルの自分の席について、その後姿を見ていると、不意に朝子のことを思い出した。

「朝ごはん、食べてないでしょ」

朝子が彼の目の前で微笑んで、猫のような目を細くした。

「作ってあげる」

エプロンをつけずに歩き出す。その姿はコンロの前に行くと、不思議とエマの後姿に吸い込まれていった。

「洋介は料理作れるくせに、食べないもんね。面倒くさいの？」

うん、と答えそうになって、やめる。これは、ただの思い出だ。

「駄目だよ、食べなきゃ。だから洋介のこと、きゅうりみたいだって言うんだよ、わたし。食べないとさ、力入らないでしょ。疲れやすいでしょ。それだと何をやっても実力の半分も出ないし、実力が出せなきゃつまんないでしょ。遊びだって仕事だってさ」

そうだね、と記憶の中の洋介が答える。

「ほら、うちのハゲだってさ」

と、彼女が引き合いに出した彼女が働いていた喫茶店の店長のあだ名を聞いて、彼はちょっと笑う。記憶の中の彼も、今の彼も。

「脂肪蓄えてるじゃん。あれって働くために蓄えてるんだよ。自分で言ってるもん。おれは食べなきゃ生きてられないって。でも、当たり前のことを言いますねって言ったら、違う違う、おれが言いたいのは娯楽としての食事だよってさ。食事が楽しいのは大事だよ。ハゲみたいに太らなくても、多少はふくよかになるべき。ほら、四捨五入したらわたしたち、三十歳じゃん。ふくよかにならなきゃ、

少し老け込むらしいよ。肌がたるむんだね」
朝子もたるむの？　と記憶の中の彼が不思議そうな声で尋ねる。
「当たり前でしょ？　わたしだって人間だよ。同い年なんだから、その辺気づかないかな、普通。洋介だって少し老け込んだと思うよ。自分の見た目に気を遣わずに仕事ばっかりしてるからわからないんだよ。清潔に見えればそれでいいって言うけど、たまには、うーん」
どうしたの？
「洋介に、おしゃれしなさいって言おうとしたんだけど、やめた。どうせ失敗するに決まってるもん。わたしは無駄なことを言わない主義」
何だよ。
「ほら、ご飯できたよ」
振り向いた顔を見て、一瞬呆然とする。それはほんのりと薔薇色の頬になった少女の顔であり、朝子の派手な顔立ちとは全く違う、エマの顔だった。そして今見ていたものがただの記憶にしかすぎないとわかったとき、彼はどうしようもなく落ち込んだ。エマが困ったような目で洋介を見て、食べないんですか？　という表情をする。彼は力なく笑って、
「食べようか」
と言った。食事が始まったら何を話すか、このときには決まりきっていた。朝子のことだ。朝子がいつどういうことを言ったか、詳細に話す。エマはいつでも真剣に聞いている。彼の、朝子の記憶にどっぷり浸かった気持ちを乱したりしない。エマは彼にとっていい聞き手だった。
朝子の記憶は不思議な形で現れることがある。
洗濯は、食事と一緒で当番制だ。彼のいる居間からは、開け放った襖の向こうにある庭でエマが洗濯物を干している姿がよく見える。彼はパソコンからふと目を離してそちらを見た。そして、どきりとした。
エマの上に、朝子が浮かんでいる。ブーツをこつこつ鳴らして歩

いている。彼女は上等の服は持っていないけれど、服装のセンスがいい。黒いハイネックのセーターに、明るいベージュのプリーツスカートを合わせ、渋い焦げ茶のブーツを履いている。髪の毛は頭の上で丸くまとめられ、その大きな塊は、彼女が動くたびにふわふわと上下する。いつだかの、秋の終わりに会った朝子だ。

朝子はエマの上をうろうろと歩いている。エマがそれに全く反応しないのが不思議なくらいだ。靴は激しく打ち下ろされ、こつこつと鳴っているのだから。

「あ、洋介」

不意に、足をとめる朝子。彼の方を真っ直ぐににらんでいる。

「遅いよ。何時だと思う？　十時だよ。約束は九時だったじゃん。わたし、散々待った。何か言うことは？」

ごめん。記憶の中の彼の声。

「仕事が立て込んでたとか、言い訳にならないよ。だって洋介が言ったんだもん。明日は仕事が早く終わるから、会おうって。ああ、馬鹿馬鹿しい」

ごめん。そう聞こえたあと、彼女は彼のほうにこつこつと近づいてくる。どんどん、どんどん。ついには居間にいる彼の目の前に立つ。

「ごめんって謝るのなら、どうして来てくれないの。待つのって、辛いんだよ。どうして。どうして早くわたしを助けてくれないの。わたしは何度も何度も売られて、何度も何度も好きにされて、それでも洋介を待ってるのに、どうして迎えに来てくれないの。どうして」

これは記憶とは違う。記憶の中の朝子は泣いたりしない。この朝子は泣いている。目の前で、しゃがみこんで、嗚咽を漏らして泣いている。

「わたしは待ってるのに」

「朝子」

つぶやいて、はっとする。これは本物の朝子じゃない。記憶と後

悔が作り上げた偽物だ。けれどそう思っても、朝子は目の前にいる。かすれたり消えたりすることなく。

「朝子」

触れようとして、エマがサンダルを脱ぐ音で意識を覚醒させた。朝子は、いない。それでは、今見ていたのは何だろう。幻覚とでも言うのだろうか。彼は、泣いた。自分が幻覚の朝子を見るほどに弱っていることを思って、泣いた。エマが廊下から居間を覗き込み、驚いたように飛び込んでくる。彼の右側に座り、背中を撫でる。彼はそれを振り払う。

「そういうのは、いい」

涙声でつぶやく。

「放っておいてくれ」

エマは自らも泣きそうになりながら、居間を出て行く。彼は一人になってただ泣く。嫌になるくらいだ。目が腫れてしまったことに気づく。鼻水がとまらないことにも気づく。自分を愚かだと思う。

こういう日は、エマに朝子の話をしたりしない。

朝子は彼の記憶をたどりながら現れる。様々な格好をしている。明るい夏服を着ていたり、厚ぼったいコートを着込んでいたりする。彼女はいつも少し高飛車で、彼にあれこれと命令をする。記憶の中の彼はそれに素直に従い、弟のようにふるまう。彼女が甘えるときもある。彼をしつこくからかったりするときは、彼に甘えているのだ。彼に優しくするときもある。それは彼が傷ついているときで、そういうときの彼女はこの上なく親切になる。彼はそういう彼女を思い出しては懐かしくなり、温かだったあのころの気持ちを甦らせる。

エマはいつでも、そういう彼を邪魔しない。邪魔しないように心がけている。彼はそれに気づきながらも、エマに感謝しきれずにいる。朝子のことを思い出すたびに、自分がエマを買ったことを後悔するのだ。しかし、そういう気持ちが表面に出てくると、彼は自分を殴りたくなる。エマを必要としているのは自分ではないかと。

彼は記憶が甦らないよう、気をつけている。しかしそれはいつもうまくいかない。

9

洋介がエマを買って、一月が経った。秋は深まり、甘い金木犀の匂いが洋介の気分を和らげる。長袖のシャツを着ている。もう、かなり涼しい。

「じゃあ、行ってくる」

玄関先に立ったエマは、ショートパンツをはいたむき出しの細い足を交差させて、表情を作る力を失ったかのように無表情だった。

「多分、すぐ帰るよ」

今までだってそうだったのだ。今回に限って特別時間がかかるということは、滅多にないだろう。

「おれがいないと、不安？」

なおも白い顔を強張らせているエマを、彼はからかった。すると思いがけず、彼女はこくりとうなずいた。そして、彼の目をじっと見る。あなたがいないと、何だか心細くて、切ないです。

彼は真顔に近い顔になって、困ったな、と思った。

「おれはさ、朝子を探さなきゃいけない。君だってわかってるはずだ。おれは朝子を見つけなければ、いつかどうにかなってしまう。今まで、辛かった。これからも、辛いだろう。朝子を見つけるまでは。だからさ、おれの月にたった一度の仕事に、君が気持ちよく送り出してくれたら嬉しい。君とおれとは共同生活者なんだ。それくらいしてくれるよね」

彼女は長い髪を指でくるくるとねじり、離し、重ねていた足を元に戻した。そして、にっこり笑った。いってらっしゃい。彼には彼女の声が明朗に聞こえてくるようだった。

玄関を閉めると、彼は一人になった。この広い空の下に一人きり。この多くの家屋が並んだ地域でも、もっと広い世界でも、一人きりだ。彼は次第に不安になってきた。心臓が不穏な鳴り方をして、彼を戸惑わせた。空、街。その二つしかないという気がしてきた。突

然、叫びたくなる。わっと叫んで、エマのいる家の中に駆け込みたくなる。一人。朝子を探しているたった一人の人間。朝子はもう、存在するのかどうかすらおぼろげに感じるときもある。そういうときは、確かに存在しているエマにすがりたくなる。

エマ。そうつぶやいて、彼は首を振った。エマは彼を笑顔で送り出したばかりだ。今彼が泣きそうな顔で彼女を求めたら、エマは何と思うだろう。また、朝子を見つけるという目的も、どうなるというのだろう。

エマがいるからこういう弱い部分が出てくるのだ。孤独に弱い自分。今まで平気なつもりでいたのに。エマがいなければ。そう思って首を振る。エマは手放せない。手放したくない。

彼はエマに執着しすぎるほどしていた。前髪を切るとき、何度心臓を躍らせたかわからない。彼女が彼の目の前で目を閉じる。それだけで怖くなるほどだった。彼女は彼を完全に信頼していた。平気で彼の前にひざ小僧を出して見せたし、胸の膨らみを彼の腕に押し付けた。その真っ白な侮りの心、それが彼を喜ばせていた。彼女が彼を信用すればするほど彼は同じ美しい白になれた。白い存在でいられる気がした。エマがいるから彼は彼のままでいられるのだ。エマがいなくなればいつか朝子すら諦めてしまうかもしれない。そうでなければ妄執の塊になるのかもしれない。中庸を保てるのはエマのお陰だった。

エマにすがりつくのはやめよう。彼はそう考えて、歩きだした。右も左も他人である国を行く気持ちだった。

花屋の前を通ったが、美奈はいないようだった。気の弱そうな美奈の両親が、忙しそうに花の手入れをしている。彼らと言葉を交わしたことはほとんどない。これからもそうだろう。彼らは洋介をそう好いてはいない。この街に昔から住んでいる人間は、よそから来た人間を好かないのだ。多分奴隷制度と関係がある。この街を背の高い囲いでぐるぐる巻きにしたのは、よその人間だ。

この奴隷の街には囲いがある。鼠返しになった青い強化プラスチ

ックの囲いだ。地面深く埋め込まれていて、地面を掘って逃げ出そうともできるものではないだろう。囲いのない場所は、海くらいなものだ。そして、海に奴隷の死体が浮かぶのは日常茶飯事である。海に身を投げる。舟で逃げる。それらは一番手っ取り早い逃げ道だ。生きるにしろ死ぬにしろ、自由がそこにある。奴隷が最も憧れている場所。それは海だろう。

この街への出入りは、パスポートによって規制されている。国内なのにパスポートがいる。不思議なことだが、そう決まっているのだ。奴隷はパスポートを持たない。だからこの街を出入りする青い電車に乗ることができない。青い電車には洋介も乗った。観光都市としてもそれなりに栄えだしたこの街には、様々な人間が来る。奴隷を見たい人間ばかり。中には彼と同じく悲壮な表情で乗っている者もいた。自分と同じ目的だろうか。そう考えたりもした。電車内は灰色で統一されている。くすんだ色の電車内部で思いつめた顔をしている自分たちは、かなり似通って見えるのだろうな。そういう気がした。

電車は、ここからしばらく行ったところにある駅から出る。彼がそれにまた乗るのはいつになるのか、彼自身にはさっぱりわからなかった。

考え事をしているうちに、入り組んだ場所にある、あの奴隷倉庫に来ていた。周囲をトタンで覆ってあり、屋根も金属製だ。庭らしい場所には手入れをされていない植木があり、中川の風流を解しない性質をあらわにしていた。彼は、気分がしぼむのを感じた。また、始まる。あのいつまでも続くノック。何度も繰り返される気まずさが。

観音開きのガラス扉の両側には、紺色の制服を着た警備員が一人ずつ立っていた。扱うものにしては厳重さが足りない気がするが、扱われる彼らは逃げる気配すらないから丁度いいのかもしれない。それに彼らはそんなに価値がない。転売に転売を重ね、どんどん値が落ちていく彼らは、市場にとってはそれほどの価値はないのだ。

洋介は、また一月前の気持ちになり、一月前の行動を繰り返した。

「失礼します」

洋介が疲れた様子で中川の部屋に入ると、中川は奥にある巨大な机に身を任せて座っていた。今日も機嫌よくにこにこ笑っている。

「疲れとるね」

「まあ」

「その様子では、朝子さんは見つかっとらんごたね」

「はい」

「もうよかろう？」

「え？」

「奴隷にされた恋人を探すのなんて、もうよかろう？」

「どうしてですか？」

声が大きくなってしまった。苛立ちが募る。煙草を吸わない中川の部屋は、中川の体臭が漂うような気がする。

「まあまあ。おい（おれ）が思ったこと、ちょっと聞けさ」

そうしてそんなことを。そう思ったが、洋介はどうにかこらえた。友好な関係を築かなければ。そうしなければ朝子は見つからないのだ。

「大変やろ？　朝子さんば探すとは。あんたが普段どんな風に過ごしとるか知らんけど、正攻法ば使わんでも見つけるとは大変やと思う。朝子さんは恐らく、もう五回くらいは転売されとる。そうなれば、この街におるのかもわからん。奴隷は戸籍ば持たん。廃棄されるけんな。あれやな。岩山で小さなダイヤモンドを探すようなもんやな。しかも別の岩山に紛れこんどる可能性もある」

「だから何なんですか」

洋介は怒りでこぶしを開いたり閉じたりを繰り返した。中川を殴りたかった。

「そんな難しいことをせんでも、こないだ買った奴隷と遊べばよかやんね。はは。そうやろ？　あんた、聖人君子のような顔をしてお

いからあの娘を救ったようなつもりでおったやろうけど、もう一月たいね。もうあれやろ？　やりまくっとるとやろ？」
「いいえ」
声を押し殺して、洋介は答えた。
「いいえって何ね。何もしとらんってことか？」
「そうですよ」
中川が、はは、と笑って丸い顔を更に丸くする。この上なく幸福そうに見えないこともない。しかしそうではないことは明らかだ。
「嘘はよせ。男はそう簡単には欲望を抑えられんとぞ。やりまくっとるとやろ？　正直に言え」
「いいえ」
洋介はかえって冷静になっていく自分に気づいた。この男はエマが洋介にとってどんな存在なのかを知らない。確かに洋介がエマに対して欲望を抱いたことがないとすれば嘘になる。エマは自分の体を彼に押しつけ、目を閉じて彼と向き合うことがあり、裸の足を彼に見せつけるのだから。けれど彼は自然とそれを抑えることができるのだ。それはエマが彼を信頼しているからであるし、彼が彼女に依存しているからでもある。エマが彼を信頼していれば、彼は朝子を見つけられる、朝子を愛せる、という奇妙な確信から来る依存。おかしなものだが、それによってエマとの関係は均衡を保っていた。
「ぼくは本当に彼女とは何もしていませんよ。ただ一緒に暮らしているだけです」
すると中川はおかしな顔をした。どこか醜悪な、歪んだ顔。次の瞬間には元の笑顔に戻ったけれど。
「それじゃあ、あんたはあの娘に何もしとらんと」
「はい」
「するつもりもないと」
「はい」
「そんなことを考えるおいは軽蔑に値すると」
洋介は黙った。肯定しても否定しても、侮辱したと思われそうで

できなかった。何しろ我慢しなければならないのだ。中川を真に軽蔑していても。
「そうか」
中川はにっこりと笑った。
「あんたはおいば軽蔑しとる。そうやろ？」
「違いますよ」
「その慇懃無礼な態度がいつも気にくわんやった。今も冷静においば見下しとるとが手に取るようにわかる」
「違います」
洋介は少し、焦りだした。
「中川さんにはいつもお世話になっているし、そんなことは思いませんよ。ぼくはただ、ぼくが買った少女のことをあなたが誤解しているから訂正しただけで」
「もう、よか」
中川は丸い顔をますます丸くして、笑っている。
「よかよ。無理せんで」
「無理なんて」
「帰れ」
洋介に興味を失ったかのように、中川は引き出しをがたがたと鳴らし始めた。洋介はその様子に不安を覚えながら、頭を下げて部屋を出た。
部屋の外、奴隷たちのいる広い場所で、田村に会った。田村は辺りを見回し、洋介に近づいてきた。洋介はいつもなら不愉快に思うこの男の耳打ちに、熱心に耳を傾けた。
「中川はあんたに何て言ってきたか」
「この間買った、少女のことで」
「下手打ったか」
「はい」
「馬鹿たれ！　上手く立ち回れ！」
「できなかったんです」

「中川は怒ったらしつこかぞ。いつまでも根に持つ」
「どうすればいいんでしょう」
「とにかく注意しろ。それしかなか」
田村はそれだけ言うと、逃げるように洋介から離れた。洋介が穢れてでもいるかのようだった。洋介は心臓が早鐘を打つのを聞いた。慌てて奴隷倉庫を出る。
走る。始めはゆっくり走っていたが、次第に速くなる。途中で何度か休み、それでも全力で走った。街の人々が彼を注視する。それを意に介する余裕もなく、彼は愚か者のように走った。陰気な感じのする住宅街に入り、家に着くころには、彼は汗だくになっていた。
「エマ！」
彼は呼んだ。慌しい音がして、出てきたのは正真正銘のエマだった。裸足のまま土間に下り、彼に抱きつく。熱い体が彼にエマの生命を感じさせる。
「どうしたの？　何かあった？」
少しほっとしながら彼が訊くと、エマは家の中を指差した。彼が顔を上げると、そこには見知らぬ女が立っていた。ずんぐりとして、白髪混じりの髪をひっつめた、むさくるしい格好をした女だ。
最初、彼は嫌な予感がした。美しくない女は、彼に度々そういう効果をもたらす。彼は不信感をあらわにして尋ねた。
「誰ですか？」
女はまじまじと彼を見つめた。大きな目だった。まるで蛙のような出目。
「本当に、あなたは彼女を人形のようにしているんですね」
低い、しゃがれ声。彼は戸惑ったまま、自分に絡みつくエマを引き離した。
「人形？」
「そうですよ。あなた、彼女をすっかり人形にしてしまった」
急に、彼は衝撃を受けた。人形。彼がエマを人形にしてきた？
その言葉は彼にはとても真実とは思えなかったが、じわじわと彼の

矜持を侵食していった。
「そんなことは、ありません」
「そうですか。なら仕方がありませんね。あなたにその自覚がないのなら」
「何が言いたいんですか？」
「申し遅れました。わたし、奴隷解放運動の地下組織の一員で、唐沢優実と申します」
「え？」
「わたし、あなたにその少女を手放していただきたいんです」
洋介は硬直した。エマが彼を見る。その目はこう言っている。
手放さないでください。わたしをあなたの人形でいさせてください。

10

奴隷解放運動のことは知っていた。インターネット上で常に右派の者たちによって槍玉に挙げられ、罵倒され、時には街中で殺され、警察に検挙される、少数派の人間たちが起こした運動だった。洋介はこの運動に参加することはなかったが、それは危険だからだった。奴隷解放運動に参加すると、政府から目をつけられ、自由に動けなくなる。それは朝子を自ら探したい洋介にとっては厄介だったし、表立って行動するのは洋介の性に合わなかった。

日本人は野蛮である。それが彼らの主張だった。野蛮であるから奴隷制度などという古い制度をまた用いだしたのだ。

洋介にはそれはよくわからなかった。長い歴史を見れば、奴隷に相当する階級の人種が常に存在してきたのは明らかだ。それに、彼は奴隷制度ができた当初、まだ幼かった。日本人が野蛮化する様子をつぶさに見てきたわけではなかった。小学校のときに同じクラスだった誰それが、身を持ち崩して奴隷になった。そういう話を聞いても、哀れに思うばかりだった。問題視し始めたのはほんの最近だ。朝子が奴隷になってから。それに、こうも思う。

野蛮だから？　どうしてそれを大声で言うのだろう。人間が野蛮なのは当たり前じゃないか。

しかし洋介以外の大体の人々は、奴隷解放運動に参加しているような人間を疎ましく思い、野蛮でないことを示すため、というより野蛮であるという耳に痛い言葉を封じるため、彼らを血祭りに上げた。先に述べたように、国家全体で彼らを虐げた。

現在、奴隷解放運動の活動らしい活動の情報は、あまり見かけない。地下で活動しているのだ。奴隷にされた人々を買取り、奴隷の街から出す。戸籍を偽造する。洋介はそれを知っていた。彼がエマについて考えるとき、思いつくのはいつもこのことだった。インターネットの網の目のような世界を巡っているうちにたどり着いた、

「正攻法ではない」やり方。朝子を救うために見つけた方法。それは奴隷解放運動の地下組織に依頼し、助けてもらうことだった。彼はそれができずに数ヶ月間苦悩していたのだ。その内にも朝子はどんどん転売される。わかっているのにできなかった。地下組織とどう連絡をとればいいのかもわからなかった。

それが、こうしてここにいる。驚くほど簡単に身分を明かして、居間のちゃぶ台に身を寄せて座っている。救いの主は屈強で頼りがいのありそうな、中年の男のイメージだった。しかし、目の前にいるのは太り気味で背の低い、ぱっとしない女だ。大きな目で、洋介を見る。好意的でもない。しかし不愉快そうでもない。ただあるのは、洋介に対する強い興味。

「エマをどうするのですか」

洋介が訊くと、優実はますます目を丸くした。

「救うのですよ」

「どうやって？」

「詳しいことは教えられません。でも、察しはつくでしょう？」

まず、偽造のパスポートがいる。それから、青い電車に乗る。もしくは特権階級の連中が持つヘリポートから、海から。海から逃げるのは容易ではない。海には大勢の監視役がいる。舟はない。持ち込んで、監視役の目をくぐって逃げるしかないのだが、うまくいくことは滅多にない。小さな舟で逃げても、行き着く先は結局日本だ。そこで捕まって、また転売されるのが落ちだ。ヘリポートを使う。これは奴隷解放運動の地下組織が所有しているのなら可能かもしれない。一番有力なのは青い電車に乗ることだ。これならば簡単だ。完璧な偽造パスポートさえあればの話だが。

「どうしてエマなのですか。ぼくはずっと朝子を探してきたのに」

洋介が思わず言葉に出すと、エマがちらりと彼を見た。優実は軽く身を乗り出すようにして、

「朝子？」

と尋ねた。

「ぼくの恋人である新田朝子です。家族のために借金をして、売り飛ばされてしまったんです。何ヶ月も探し続けているのですが」
「写真を」
彼は勢い込んで衣装ケースに飛びつき、衣類の底から写真立てを取り出した。それを見せると、エマはじっと見つめた。長い茶髪を巻き、どこか野生動物を思わせる意思の強そうな目をした朝子。それを見せたのは初めてだったな、と洋介は思う。エマはにじり寄り、正座をしたままそこから目を離さなかった。
「美しい女性ですね」
優実がちらりとエマを見ながら、そうつぶやいた。洋介はそのあとの言葉を待った。しかし何も出てこない。痺れを切らした洋介が口を開くと、
「わかっています。われわれが何とかいたします」
と、優実は答えた。洋介は軟体になってしまったかのように、ぐにゃりと座った。その手から、エマが写真立てを奪う。至近距離で、何か話しかけでもするかのように見つめている。洋介と優実は彼女を見て、次に顔を合わせた。お互いに真顔。
「でも、今回お話したいのはこの少女のことなんです」
「エマの？」
「先程言いましたよね。あなたはこの少女を人形にしている。毎日髪を梳き、爪を塗り、服やものを与え、私物化している」
どうしてそのような細かなことを知っているのだろう。そう思って、洋介はぞっとする。それよりも強く、「人形」「私物化」という言葉が彼を苛立たせる。
「ぼくは彼女に不自由させていないし、他の人間のように彼女を」
「確かにそうですね。彼女はあなたによく懐いているし、あなたは彼女を性的に痛めつけたりしません。でも、健全でしょうか？　それは。あなたはもしかして、お金によって彼女の何か大事なものを、奪ったのでは？」
「それは何ですか？」

「わかりません。しかしそれはあなたを彼女のそばに置けば、将来必ず明らかになることだと思います。われわれはそれを待ってはいられません」
「早くぼくから引き離さなければならないと」
洋介はふと笑った。奴隷解放運動などという少数派の、偽善に満ちた活動をする輩に、自分とエマのことなどわかるのだろうか？　彼はこうもエマを大切にし、エマも彼を必要としているのに。結局は、馬鹿なのだろう。大声で「日本人は野蛮である」と当たり前のことを喧伝する連中の一人に、人間の機微などわかるはずがないのだ。
そもそも、彼らは何をしているのだ？　街には、エマなどよりもよほど悲惨な奴隷たちが溢れているではないか。彼らを救わないのだろうか？　そもそも、この女は本当に奴隷解放運動の地下組織の一員なのだろうか？　おかしいではないか。いきなり現れ、地下組織のことを言葉に出し、エマをさらおうとする。
「色々な疑念があなたの頭の中で渦を巻いているのでしょうね」
彼はぎくりと優実を見た。優実は相変わらず興味津々に彼を見ている。
「わたしは本物ですよ。でなければ、そんな危険な真似をするわけがない。今あなたがわたしのことを通報したら、一発でわたしは捕まってしまう。それなのに名前まで名乗りますか？」
「偽名かもしれない」
彼が答えると、優実は笑うこともなく半眼になった。
「そういう可能性もありますね」
「それなら信用なんて」
「できないっていうんですか？　それも構いませんよ。彼女は今、幸福だと思っているようですからね。彼女が幸福だと思っているうちはいいんです。われわれは急ぎません。しかし、あなたが必要だと気づいたときは、ここに電話してください。わたしの名前を出せばそれだけで充分です。わたしがあなたの元にまた来るでしょう。

それまで、彼女を幸福なままでいさせてあげてください」
優実はメモ用紙をちゃぶ台に置いた。洋介はそれをじっと見つめた。
「わたしはこれで帰ります。その番号を警察に届けても無駄ですよ。われわれは逃げる術を持っています。それでは」
体型に似合わぬ素早さで、優実は立ち上がり、襖を開けた。振り返り、明瞭な声を上げる。
「あなたがやっていることは、『飼育』です。それを忘れないように」
出て行く優実を横目で追っていると、ちゃぶ台に何か固いものが置かれる音がした。乱暴な音。エマが朝子の写真立てを立てているのだった。
「どうした？」
仏頂面で首を振るエマ。
「あのおばさん、失礼だよな。飼育なんかじゃないのに」
しかし、胸の奥から嫌な、ねじれるような音が聞こえてきた。同意の音。しかし、違うという気もする。エマと自分の日常を見張っていただけの人間に、何がわかるというのだ？　二人の関係に参加したわけでもない。ただの他人に。
不意に、エマが彼の右腕に抱きついてきた。相変わらず仏頂面だったが、次第に甘えるかのような、とろけた表情になっていく。彼はエマの小さな乳房が彼の腕に密着するのを感じて、ため息をついた。彼は自然に我慢できている。人間であるために。人間を飼うという恐ろしい所業を避けている。それなのにあの女は彼の行為を「飼育」と名づける。
メモ用紙が目に入る。彼はエマの体をどけて、じっとそれに見入った。
「本物かどうかさえわからないのにね」
そう言いながら、彼は朝子の写真立てを開き、裏蓋の内側にそれをしまった。彼にはチャンスかもしれないのだった。朝子を見つけ

るための。
エマはその行為をじっと見つめていた。
夕食が済み、エマが風呂から上がってきた。すぐに彼の前に座る。彼は少しためらってから、青い櫛で彼女の髪を梳いた。彼女の髪は柔らかい。指にまとわりついてくる。この髪に触れるたびに、彼は彼女を手放したくないと思う。
爪を塗るときもそうだ。今日は白いマニキュアを塗っていたのだが、気づくと彼女はぽろぽろと涙をこぼしていた。彼はわかっていながらもこう尋ねる。
「どうしたの？」
彼女は唇をへの字にして爪を見た。爪はますます不健康に、黄色くなっているが、白いマニキュアのお陰でそれはわからなくなっていた。
彼女は何もかも構わず彼の右腕に抱きついた。彼は服にマニキュアがつくのを感じた。粘着力のあるものがついては離れる感触。
「エマ」
彼女は目を真っ赤にして泣いていた。彼は、困ったな、とため息をつく。その口を押さえられる。彼女の手で。彼女の目は、わたしに呆れないでください、と言っている。
「わかった。わかったからこの手を離して」
彼は無理矢理細い手首を掴んで下ろさせた。エマは泣いている。相も変わらず。
「君をおれから引き離したりしないよ。大丈夫」
彼女はそれを聞くと、彼の腕に顔を押し付けた。彼はこっそりため息をつきながら、考えていた。
彼女をどうにかしなければ。

11

どうにかしなければ、と考え始めて、何日も経つ。洋介はエマと朝子のことを交互に思い、どうすればいいのだろう、と悩んだ。

地下組織に全てを任せて、エマをどこかに逃がし、朝子を救う。これが一番いい気がした。組織につながりを持ってしまったのに何もしないのは、臆病者だ、という気がするので尚更だった。

しかしエマを逃がすのは、少し薄情な気がした。エマは彼から離れたがっていない。それなのに彼自身が彼女を引き離すのだ。彼女はどれほど傷つくだろう。

それに、彼女の髪を切り、梳かし、爪の手入れをするのは一体誰になるのだろう。彼は彼女のことを、一人では何もできない幼い子供のようにも思っていたから、それらを彼女自身が行うという可能性を考えずに、その誰かに嫉妬した。憎しみを抱きさえした。

彼女は今、退屈そうに畳の上に足を伸ばしてどこか遠くを見ている。ミニスカートを履いたその足は、黒い無地のタイツに包まれている。繊細な、足と感じさせない細い足。その形は、根元から切り取って美術館に展示しても、芸術品として通用しそうな気がするほどだった。けれど、彼は一度も彼女にそのような感想を告げたことがない。彼の隠れた欲望を吐露するようで、それはとても恐ろしかった。彼女に恐れを抱かせるというよりも、彼の中の理想の自己像を崩してしまうようで、そちらのほうがよほど恐怖を覚えた。

「エマ」

彼が声をかけると、彼女は壁に寄りかからせていた背中を起こして、ぱっと明るい笑顔になった。彼女は彼が声をかけると、いつも嬉しそうに笑う。まるでペットだ、と彼はふと思い、はっとして首を振る。

「外に出かけようか。買い物じゃなくて、散歩ね」

考えが行き詰っていたので、そのほうが丁度いい気がした。一人

で歩き回っていたら、堂々巡りになってしまう気もしたから。それに、田村からの忠告が未だに効いていて、彼はエマを一人にすることがほとんどなかった。エマはそのために、より彼に密着するようになった。家にいるときも、外に出たときも。ぴったりと彼の右側に寄り添い、離れない。彼女の目は、近頃今まで言わないことを言うようになっていた。彼はそれをうまく読み取れなかった。複雑でわかりにくい、戸惑いを含んだ信号。彼はわからないことをわからないままにして、日々を過ごしていた。

彼女は散歩の一言を聞いて、ぱっと立ち上がった。無地の長袖のTシャツに、横に放置してあったやはり無地のカーディガンをかけて、準備万端です、と笑った。

「女の子のくせに準備が早いよね、いつも」

彼はパーカーを上から被ってから微笑み、彼女と連れ立って玄関に出た。彼女は彼に買ってもらったスニーカーを履く。彼女がこの靴を踏み潰したことは、今まで一度もない。だからこの靴は今でも新品同様にしゃんとしている。彼は彼女が玄関を出たあと、自分のスニーカーを履いて、こういう生活ももう終りかもしれない、と考えていた。

家の裏手に、小川はある。コンクリートで両岸を固められた、あまり曲がっていない、滑らかな形の川だ。ここにはよく白鷺や青鷺がやってきて、彼女を興奮させる。鳥たちは彼女が喜ぶたびに、さっと羽根を広げて逃げていく。その様は烏や雀に比べて優雅さや気品を感じさせるが、彼にはわかっている。白鷺や青鷺は体が大きすぎるので、ゆっくり動くしかないのだ。その動きが彼らを小さな鳥よりも上品に見せるのだろう。それに気づいていないのか、彼女は飛んでいく鳥を嬉しそうに眺める。この上なく美しいものを見たかのように、うっとりと。もしかして、と彼は思ったことがある。彼女は白鷺や青鷺を見たことがなかったのだろうか。

小川に沿った道を二人で歩きながら、こういう風に二人で歩くのは何度目だろう、と彼は思う。彼女の中ではどういう意味を持つ時

間なのかはわからないが、彼にとって、これは小休止ともいえる時間だった。彼女を意識しすぎて疲れずに済む。彼女が彼に密着してくるのに動揺しなくて済む。見知らぬ少女と二人で過ごす生活の緊張を、ふと和らげてくれる。彼は底に草の生えたどうということもないこの川を眺めながら、無心になっていた。エマはにこにこしながら歩いている。

「ねえ、エマ」

声をかけると、彼女は目を細めて彼の顔を見上げた。上機嫌だ。

「おれのこと、卑怯者だと思う？」

彼女は驚いたように目を丸くした。その目で尋ねる。どうしてそんなことを言うんですか？

「だって、おれはずっと朝子を探してるように振る舞ってるのに、朝子を正攻法でしか助けようとしてないんだ。卑怯な手も、違法な手も、使おうと思えば使えた。自分を危険に晒せばね。でも、危険が怖くて、色々言い訳をして何ヶ月も何もしなかった。卑怯者だと思わない？　それに、おれは朝子を本当に愛しているのか、時々わからなくなるんだ。だって、朝子らしい奴隷を見つけると、怖くなるんだ。本当に朝子だったらどうしよう。奴隷になってしまった恋人が目の前に現れたらって。まだ朝子は見つかってないけど、本当に、おれは怖い。朝子に対してどう挨拶をするか、本心で喜べるのか」

エマは、うつむいて話を聞いていた。

「卑怯者で薄情者だ。おれはどうしようもなく駄目な奴だ」

エマが彼を見上げた。青みを帯びた白目に、黒い瞳が浮かんでいる。エマは無表情のまま、彼の右腕に抱きついた。彼は外でこのようにされることにはあまり慣れていないので、いつの間にか立ち止まって硬直していた。

エマが顔を上げる。言いたいことがあります。笑ったその目はこう言っていた。わたしは、あなたのことが好きですよ。とっても好きですよ。あなたが自分を卑下しても、わたしはあなたが好きです。

大好きです。わたしは、わたしは。
　そのあとの意味は、彼の頭が真っ白になってしまったので、わからなくなった。彼女が彼の首に腕を巻きつけ、顔を引き寄せ、唇を撫でたのだ。撫でた、というのは正確ではない。唇同士が触れ合ったのだから、それは口づけた、と表現すべきだろう。しかし、彼には撫でられるような感触だった。薄荷の匂いがした。彼女の口の中の匂いだろう。彼女自身のような、清潔な匂い。彼女は口づけたあと、すぐに彼から体を離した。うつむいて、歩き出した。彼より前を。多分彼女は羞恥心を抱いているだろう。同時に、幸福感をも。彼女は目つきや表情では伝えきれないことを、行動で示した。それは、彼にとってはとても恐ろしい、何よりも避けるべきことだった。
　だから、彼は逃げた。彼女を置いて、引き返し、家へと走り、玄関の中に入り、鍵をかけた。そして、家の中で頭を抱えた。後を追ってきた彼女がドアを叩いても、彼は応えなかった。
　とうとう、ここへと来てしまった。自分の行動ではないけれど、来てしまった。ここから、どうすればいい？　エマと、二人でこれからも過ごせるか？　いや、できない。恐ろしくて、できない。自分が怖い。何をしてしまうかわからない。
　彼は強く目を閉じ、エマが叩くドアの音を聞いていた。多分、エマは泣いている。彼に拒絶されたことで泣いている。彼自身、こうまで自分が弱いとは思わなかった。彼女を泣かせてまで彼女を怖がる自分が理解不能だった。どうしよう。どうすればいい？　何かを懸命に考えても、それは一つの結論にしか至らない。それを回避する手段は何一つわからない。時間が刻々と過ぎていく。
　夕方、彼はようやく彼女のいる玄関を開けた。鍵の回る音がした瞬間、何かが体を起こす気配がした。彼女だった。彼女は泣きはらした目を彼に向けて、次に諦めたようにうつむいて家に入り、彼の横をすり抜けて居間に入った。
「エマ、ごめん」
　彼は彼女を追いかけて居間に入ると、出かける前のように足を伸

ばして座っている彼女に頭を下げた。どこか、彼ではない何かを見ているエマの目に、涙の粒が盛り上がる。
「ごめん」
もう一度謝ると、涙は溢れて頬を流れた。彼はこういうものにもはや動揺しない自分に気づいた。
「悪いけど、おれは君とは暮らせない。怖くてできない。だから、この間の奴隷解放運動の女に、君を任せようと思う」
彼女の唇が震える。涙は次々に流れていく。
「彼女は本物かどうかわからない。でも、試す価値はある。君を安全なところに連れて行ってくれるかもしれない。大丈夫。おれは君が無事か確認する方法を考えた。どうにかなるよ。大丈夫だよ」
突然、彼女は顔を彼に向けた。涙で濡れた、赤い目。彼女は無理矢理のように微笑んだ。彼はその目に、意味を見出さずにはいられなかった。
それでも、あなたを愛しています。

12

「そう、いきなりのことでびっくりしたやろうけどね」
「はい」
洋介は震える声で答えた。
「今月はまだ一日から一週間も経っとらんけん、おい（おれ）も驚いたよ。いつもなら一日にしか仕入れはなかとに」
「そうですね」
「早く来(き)んしゃい。朝子さんも待っとるけん」
唐沢優実に電話をかけようと携帯電話を手に持って逡巡していると、着信があって慌てて通話ボタンを押した。中川からだった。最初は不信感を抱きながら話を聞いていたが、朝子が見つかった、という知らせを聞くと、驚きのあまり何も考えられなくなった。朝子が、手の届くところにいる。信じられない。
もちろん、いつも朝子に似た女を見つけるたびに感じる恐れもあった。しかし、実際に朝子がいるとわかれば、飛んで行かないわけにはいかなかった。何故なら、ずっと探してきたからだ。追い求めてきた。泣きながら追いかけてきた。それでも行かないとすれば、自分は本当の臆病者で、卑怯者だと思った。
エマはしんと静まり返った仏間に、一人こもっていた。何の音も聞こえない。泣いていても声を出さないのだ。それほど激しく泣きじゃくっていないという証左でもあったが、彼にとっては少し不安なことでもあった。もしかして、死んでしまうかもしれない。そう考えてしまう。自分が彼女を拒んだからといって、彼女が自殺してしまうなどという自惚れた考えは持っていない。けれど、何か嫌な感じのする静けさがあった。
「エマ」
反応はない。こういうとき、エマが言葉を発することができるといいのに、と思う。

「出かけてくるよ。朝子が見つかったかもしれないんだ」
しばらく反応を待つ。エマは驚いているに違いないが、何の音も立てない。
「夕食はどうなるかわからないけど、おれが遅くなるようだったら一人で食べててよ。朝子が見つかったって中川さんは言うけど、何かの間違いもありうる。三人分も用意しなくていいからね」
静かだ。彼は、エマという存在が聴覚以外の感覚で認識されていたことを改めて思った。見えないところにいては、彼女が本当にいるのかどうかということさえ希薄だ。いるのかいないのかわからない彼女に向かって、彼はまた声をかけた。
「きっと帰るから」
その言葉は、帰らないなどという決断がありうるということを意識させた。エマを放っておいて、朝子と一緒に逃げる。でも、それは起こりえない。この街を出るためのパスポートはこの家にあるし、朝子はパスポートを持っていない。優実に連絡を取って偽造してもらうにしても、その連絡先は居間にある写真立ての中に入っているのだ。彼はあえてそれらをこの家に置いていった。エマを断りもなく置き去りにするような、卑怯な人間にはなりたくなかった。
夕暮れの街は、数日前と比べてもかなり薄暗くなっていた。車が勢いよく横を通り抜ける時に吹く風が、とても冷たく感じられる。Tシャツの上にパーカーを着ただけでは、少し肌寒い。奴隷とその飼い主が、彼と通りすがる。何組も何組も。女の奴隷も、男の奴隷も、年を取った奴隷も、全て首輪をつけていた。彼はエマに首輪をつけたことなど一度もない。いっそつけてしまえば楽だったのだろうか。彼女を完全なる奴隷にしてしまえば。いや、それでは彼は辛くなるだけだ。彼は割り切ることができない。朝子が連れて行かれてから、奴隷の存在をそのままに認めることができない。
歩いていると、小さなビルの一階にある、美奈の花屋の前を通りかかった。美奈はいるだろうか、と中を覗きこむ。少し、話がしたい気分だった。

「どうかしたんですか」
怒ったような美奈の声が、むせ返るような花の匂いと派手な花々の向こう側から聞こえてきた。驚いてそちらを見ていると、彼女は花の入った缶の間からすっくと立ち上がり、その姿を見せた。
「花粉が鼻についてるよ」
彼が言うと、彼女は慌てて袖で鼻の頭を拭いた。それでも表情は固いままだ。
「あのね、相談したいことがある」
美奈の表情が和らぐ。きっとエマがいないことがいいのだろう。彼にとっての、美奈のいつもの顔に戻る。
「どがんしたとですか」
「朝子が見つかったらしくて」
美奈がぱっと明るい表情になる。
「よかったじゃなかですか」
「うん」
「何で元気なかとですか？　嬉しくなかとですか？」
「エマを手放そうと思ってさ」
美奈が目を丸くする。しかしどこか安心したような顔だ。彼は自分もこういう顔をしているのかもしれないと思って、後ろめたい気分になる。
「もちろん、しかるべき相手に預けるんだよ。売ったりしたら可哀想だ」
「まあ、そうでしょうね」
「でも、エマが傷ついててさ。おれのせいで泣いてる」
美奈の表情が冷たくなる。冷笑しているようにも見える。
「しょうがなかですよ。奴隷ですから。今までよくしてもらえたんだからそれでよかとです」
「そうかな」
美奈の表情に、彼は不安を覚えた。
「そうです。工藤さんは、朝子さんば買ってこの街で静かに暮らし

たらよかとですよ。それ以外の人間の人生まで背負ってはいられないでしょう」
「そうだけど」
まさか朝子を連れてこの街を出るのだとは言えなかった。美奈がいくらよくしてくれているとはいえ、それほどの重大なことは漏らせない。
「朝子さんは奴隷倉庫ですか」
「うん。まあ」
「なら早く行ってあげればよかですよ」
美奈は微笑んだ。彼は安心したような気持ちでうなずいた。美奈の笑顔を見るのは、エマを買って以来初めてだった。エマの存在は、彼の周りにいる様々な人の気持ちを固くしていた。それを考えれば、エマを疎ましくさえ思うのだった。
美奈に挨拶をすると、洋介は奴隷倉庫に向かって歩き出した。少し遅くなってしまったかもしれない。朝子は待ちわびているだろう。それなのに、何故だろう。急ぐ気が起きない。怖いのだろうか。変わってしまった朝子を見るのが。
「大丈夫だ」
彼は一人つぶやき、意識的に早足になって歩いた。奴隷倉庫は目の前にある。
二人の警備員の間をすり抜け、扉を開く。コンクリートの固い床を踏む。雰囲気は、ほとんど変わっているところがない。ペンキで「男」「女」と書かれているのは相変わらずだったし、囲いも左右にある。怖いほどに音がしない。彼は不思議な気がして辺りを見回した。中に入ったら、何か変化があるような気がしていたからだ。例えば、朝子の気配がする。あの明るい、意地の悪い声がして、どこからか彼女が現れる。しかしそんな作り話のようなことは起こらないのだろう。そう自分を納得させて、中川の部屋に向かった。立派な扉の向こうに、人の気配がする。心臓を轟かせながら、彼はノックした。

「来たか」
返ってきたのは、中川の声ではなかった。意気消沈した誰か別の人間の声だ。不思議に思ってドアを開くと、田村が一人、中川の椅子に座って洋介を見ていた。疲れたような目だ。
「もう遅かぞ」
「え？」
遅い？　朝子はどこかへ売られてしまったのだろうか？　彼がぐずぐずしていたせいで。そう考えたが、田村の様子はどこかおかしかった。頭を抱えてため息をつきさえする。
「あんた、よか大学ば出て、よか会社に勤めとったそうやんか」
何の話だろう。
「でも、頭の悪か。簡単に騙されたな」
騙された？　心臓がおかしな鳴り方をする。
「中川はなあ、朝子さんば見つけたて嘘ばついて、あんたの家に行ったとぞ。あんたが買った娘は今頃中川の好きにされとる。あんたは」
続きは聞かなかった。洋介は血相を変えて部屋を飛び出した。倉庫の部分を抜け、入り口を出て、道をひたすら走った。次々に人にぶつかるが、謝る余裕などない。謝ろうとさえ思わない。この間走ったときほどには、辛いとは思わなかった。ただ焦りと後悔があったばかりだ。
「畜生」
口をついて出た言葉は、自分に対してのものなのかもしれなかった。エマと暮らすのが怖くなったからと、彼女を人に任せてしまおうなどと思い立った自分は、畜生そのものだった。エマを捨てて朝子と暮らそう。そんな単純な考えを持った自分は愚か者だ。エマを助けなければ。エマがどうなっているのか、あえて考えようとせず、彼は汗だくになり、全身の筋肉に痛みを感じながら走った。
花屋の横を走りぬけた気がする。美奈がぽかんと彼を見ていた。しかし気にする余裕はなかった。走るしかない。走らなければ。

住宅街に入り、驚いた顔をした小学生の集団を掻き分け、洋介は家の中に入った。その途端、足元から崩れ落ちる。

家の中は、完全に荒らされていた。襖や障子が開ききった仏間や居間から、様々なものが廊下に溢れ出している。エマの服。エマのブラシ。震えながら中に入ると、居間の押入れに入っていた布団が乱雑に引っ張り出されている。彼のノートパソコンは畳に落ちて開き、ちゃぶ台は裏返しになっていた。

「畜生」

エマはいない。連れて行かれてしまったのだろう。自分のせいで。少し考えればわかることだったのに、どうして気づかなかったのだろう。

「エマ」

つぶやくと、涙がこぼれてきた。同時に、エマはどこに連れて行かれたのだろう、という考えが浮かんでくる。奴隷倉庫に戻って、田村に吐かせよう。中川を見つけて、殺してやるのだ。狂気のような怒りが湧き起こってきた。殺すのだ。殺して、エマを取り返すのだ。

そう考えて立ち上がったときだった。すぐそばで、物音が聞こえた。驚いて、押入れの戸袋を見た。がたがたと開き、中から飛び出すようにして黒い棒のようなものが現れた。いや、足だ。足はどんどん伸びて、小さな臀部が、スカートが、Tシャツに包まれた胴体が、腕が、最後に青ざめた幼い顔が、次々に出てきた。彼は呆然とそれを見守っていた。開いた押入れの段に足を乗せると、エマは器用に体をしならせて降りてきた。そして、そっと彼を見上げる。その怯えきった目を見てから、彼は気づくとエマを抱きしめていた。

無言だった。彼は何も言えなかった。頭の中がごちゃごちゃと散らかっていて、考えることができなかったからだ。彼女は、泣いていた。最初は静かに。段々と、涙の量が増えていく。ひいひいと、息の漏れる音がする。

「怖かったよね」

彼女は懸命にうなずく。
「ごめん。おれ、騙されてたことに気づいてなかった」
彼女は彼の顔を見上げた。涙で顔は汚れ、相変わらず激しく泣きじゃくっているのに、声がしない。呼吸の音が激しく聞こえるだけだ。彼は初めておかしなことに気づいた。
「エマ、もしかして、声が出ないの？」
うなずく。そして、彼にしがみついて、顔を埋めた。彼は体中が冷たくなっていくのを感じた。
「いつから？　さっき？」
首を振る。
「生まれつきなの？」
もう一度、首を振る。
「じゃあ、奴隷として売られたとき？」
そっと聞くと、ひいひいという音はますます強くなった。彼の胸に額をぶつけるようにして、彼女は何度もうなずいた。彼は、自分がひどく情けなくなる。
「ごめん。気づかなくて、ごめん。君が少しも声を出さないのはわかってたのに。本当にごめん」
彼女は何度も首を振る。ただ、泣く。声もなく。
「大丈夫だよ。もう大丈夫。中川は来ない」
彼の体に、服に染み込んだ彼女の涙が触れた。生暖かい。彼は一層彼女を強く抱きしめた。何度も謝り、何度も「大丈夫」を繰り返している内に、彼女の嗚咽は段々と落ち着いてきた。
「もう平気？」
彼女は真っ赤な目のまま、うなずく。すると彼は彼女をそっと離し、
「すぐ帰るから」
と部屋を出て、玄関に向かった。

13

奴隷倉庫に行くと、警備はいつも通りだった。人気もない。警備員の間を無言で通り抜け、中に入る。奴隷倉庫の中はさっきと同じだ。男と女の囲いがある。そして人はいない。洋介はつかつかと中川の部屋に向かった。女の囲いの向こうにある、樫の扉。真っ直ぐに歩く。そこに誰かの急ぐような足音が後ろから聞こえてきた。構えて振り向くと、田村だった。

「何ですか」

「中川に何の用か」

田村は青ざめていた。洋介は、今までにない冷静な顔つきで、彼を見ていた。

「あんたは何で教えてくれなかったんですか」

「何や。どういう意味か」

「これほどにエマやぼくを気遣ってくれるのなら、中川の目的を教えてくれてもいいでしょう」

田村はそれを聞いてさっと辺りを見回した。そして、小さく叫ぶ。

「下手は打たれん」

「下手？」

「下手を打てば首になる」

「なってもいいじゃないですか、こんな仕事」

「中川を殺すのはおい（おれ）や！」

ぎょっとして、洋介は田村をまじまじと見た。この細身の男は、震えながら床を見つめていた。五十歳くらいだろうか。短く刈った髪は白髪交じりで、無表情だった顔は鬼の形相をしている。

「あんたには渡されん」

田村は、それだけ言うとすたすたと奴隷倉庫の奥に消えていった。青い作業着の背中が寒々しい。

田村の言葉は、洋介の中にあった中川に対する静かな怒りを刺激

して、これからどうするべきかという考えを具体化させた。中川を殺すな、という意味の言葉が、殺せ、と命じたように思えたからだ。エマを襲おうとした奴だ。殺したって何も問題ない。洋介の目はぎらぎらと輝きだした。

ナイフか何か、持って来ればよかった。道具が一つもない。何も考えずにやってきたが、家にいるときにこの殺意に気づいて用意すべきだったのだ。そう考えた洋介は、倉庫のどこかにあるであろうと目星をつけ、歩き出した。

「入らんとか」

振り向くと、中川の部屋から、中川が顔を出して笑っていた。洋介はかっとなって勢いよく歩き出した。次第に走るようになる。扉に近づき、大きく振りかぶった拳は、中川の顔をかすりもしなかった。中川が顔を引っ込めたのだ。扉を無理矢理開けようとすると、それは勝手に開いた。中から出てきたのは、作業着を着た二人の若い男だ。二人とも、少し笑っている。嘲りの顔だ。双子のようによく似て見える。

「捕まえとけ」

男たちの後ろから中川の声がする。洋介は後ろを向いて走り出そうとしたが、早速腕を掴まれ、後ろ手に押さえつけられて、部屋の外のコンクリートの床に押しつけられた。歯を打った。血の味。じんじんと体中が痛む。体中を打撲したように感じられる。ひひ、と男たちの内一人が笑い声を上げる。

中川はゆったりと部屋から出てきた。いつもの、幸福そうに見える笑顔を浮かべて。

「何しに来たとかね」

洋介は頭を押さえつけられていて、中川の顔を見上げることすらできない。そこに中川が身を寄せて、しゃがみこむ。

「あの娘はどこにやったとかね。探したばってん見つからんやった」

中川の顔が大きく、より醜く見える。洋介が思いついて唾を口にためようとすると、中川はひょいと顔を上げた。

「唾ね。映画のごと吐きつけてやろうと思ったとやろうけど、人間、そう簡単に自分ば憎んどる奴の顔には近寄らん。あんたは本当に馬鹿やねえ」
洋介は羞恥の余り怒りを加速させたが、どうしようもない。男たちは洋介と大差ない体格だったが、二人がかりでは動きようがない。中川は、大きくため息をついた。
「情けなかね。こうなることも想像できんやったとか。あんたは本当に単純な男やね」
洋介は無言だ。涙が出そうなくらい屈辱的だった。中川を殺すどころか、反対に捕まってしまうとは。これからどうなるのかを想像すると、戦慄が起こる。しかし、次の瞬間、意外な言葉が中川の口から発せられた。
「放してやれ」
どきりとする。男たちの戸惑いが伝わってくるようだ。
「可哀想やろ。おいは怪我しとらんし、逃がしてやろうで」
信じられない気持ちで中川を見る。足元しか見えないが、確かに中川の声だ。洋介を押さえつけていた男たちは、困惑気味に彼から離れた。洋介が、ゆっくりと立ち上がる。
「まずおいがあの娘ば犯って、あとでこの二人に順番ば回してやるつもりやったさ」
中川は少し離れた場所で立って、くつくつと笑った。本当に愉快そうに。
「でもな、あんたもこのまんまじゃこの街におられんなあ。何せこのおいに暴力ば振るおうとしたとやけん」
中川は黙った。洋介は中川の言葉を待っている。今、中川は洋介をどうすることもできた。けれど何もしない。今洋介が逃げても、何もしそうにない。続く言葉が、洋介を叩きのめしたが。
「今夜中にこの街ば出て行くことやね。あの娘は置いて。何もかも、諦めること。それしかなかろう？　おいはあんたば殺しても、何も言われん。あんた一人消えても、何も起こらん。この奴隷の街では、

人一人がいなくなっても注意は払われん。おいがあんたを奴隷にするのは簡単さ。おいが頼めばそうできるとやけんな。対してあんたは何や。おいに何かできるとや。できんやろ？　出て行くことやね。せいぜい。これはお情けぞ。ありがたく受け取れ」

殺してやる、殺してやる、殺してやる。洋介の中で殺意が盛り上がってきたが、彼はどうすることもできなかった。中川の言うことは事実であるような気がしたし、完全に打ちのめされていた。まず、自分を守らなければ。できることならば、エマも守らなければ。しかしどうやって？

洋介が素早く中川と部下たちを見回して、どうすべきかためらっていると、中川が何かに気づいたような顔をした。ふと、笑う。

「何や、田村」

首をねじり、後ろを見る。田村が先程よりも青ざめて立ち尽くしていた。

「あの、話のあるとですけど」

「何や」

「ちょっと、こっちに」

「おいはお前に近づかんぞ。何か持っとるとやろ」

はっと気づくと、田村は大きな包丁を作業着の懐から出して、笑い泣きをしているような奇妙な表情で立っていた。手に掴んだ包丁は、ぶら下がるように揺れている。先程洋介を押さえていた男たちが、慌てて田村に飛びつく。田村は抵抗するが、元々小柄な男だ。力はあるらしく一旦は彼らを押しのけるのだが、片方の男に包丁を奪われ、もう片方の男に隙を突かれて押さえ込まれて、あっという間に先程の洋介と同じ立場になっていた。

中川がにやにやと笑っている。その表情には何かぞっとするものがある。洋介はじりじりとそこから離れようとする。

「畜生。由紀ば返せ、中川」

田村のくぐもった声がする。中川がその口に自分が履いている革靴の先を突っ込むと、田村はそのままわけのわからぬことを叫ぶ。

黒い革靴は、上等に見えるが大して清潔そうでもない。田村の歯がそこに食い込む。
「由紀って、何や。誰のことや」
中川が靴を抜く。よだれで汚れた靴を、ちらりと見やり、それから田村をにやけた顔で見下ろす。
「おいの娘や。お前が殺したこと、忘れたか」
田村は真っ赤に血走った目で中川をにらむ。いつもの田村の顔とは全く違う。普段表情のなかったこの男は、今、憎しみで顔を歪ませている。中川は表情を変えない。まるで言われたことを初めからわかっていたかのように。
「お前の娘ば犯ったとは覚えとる。確か十七歳やったな。それがどうした」
「お前は鬼畜生や。地獄に落ちるぞ。あのあと由紀は自殺したとぞ。お前のせいや」
「何言いよるとや。お前の娘は奴隷やった。何されても文句は言えん」
中川がせせら笑う。田村の目から、涙が溢れ出す。
「おいの借金や。おいが奴隷になるはずやった。それをお前が書類ば書き換えたとやろうが」
「知らん。まあ十代で借金はできんけん、何か間違いの起こったとやろうな」
「何が間違いや。お前は」
また中川が田村の口に靴を突っ込んだ。中川は一人、笑っていた。楽しげに、これ以上愉快なことはないと言わんばかりに。中川につき従う男たちは、初めこそどうすればいいか迷っていたが、中川の視線を浴びて、笑い顔を作った。
洋介はもう、出口近くに来ていた。中川が目ざとくそれに気づき、また笑う。
「逃げよる。情けなか男やな。田村とは仲間じゃなかとか」
走り出す。背中に中川の笑い混じりの罵声が飛ぶ。

「この街にお前の住む場所はなか。あの娘ももうおいのもんや。早く出て行け。電車の（が）なくなるぞ」
絶対に、そうはさせない。洋介は思った。エマを、好きにはさせない。エマを、助けるのだ。エマは、おれのものだ。
扉を出て走りこんだ敷地内に、エマが入っていたのと同じ形の瓶が三つ、並んでいた。洗っていたのだろう。つやつやと、光っている。洋介はふと思いついて、砂利を握った。そして、思い切り振りかぶって、投げた。ばちん、と硬質な音が鳴り、勝ち誇って瓶を見るが、割れるどころかひびすら入っていなかった。警備員が声を上げて近寄って来る。洋介はまた、走り出した。
エマはおれのものだ。誰にも、渡すものか。

14

血相を変えて走る洋介を、美奈が呼びとめた。苛立ちながら、洋介は足をとめる。

「どがんしたとですか。今日は何回も行ったり来たりしんさあですね」

美奈の心配そうな顔を見て、洋介は少し気持ちを落ち着ける。美奈には、少しだけ話してしまおう。彼女にはそれだけ世話になった。

「街を出ることになった」

「え？」

「中川を怒らせてさ」

「じゃあ」

「今夜発つ。どうしようもないんだ。逃げるしかない。中川は恐ろしい奴だから」

「奴隷は？」

美奈の目が期待に輝いていた。洋介は初めてこの女に嫌悪感を抱いた。おそらくエマを売り払うことを期待しているのだろう。美しくもないくせに。ふとそんな考えが浮かんだ。美しくもない女が心根まで汚ければ、洋介にとっては不愉快なだけだった。

「エマは、人に預ける。連れていくわけにはいかないから。おれ一人で逃げる」

「朝子さんは？」

それを聞いて、突然体中から冷たい汗が噴き出してきた。洋介は今やっと朝子のことを思い出したのだった。完全に忘れていた。ぞっとするほどに。

「朝子は、人に任せてる」

これは、本当のことだった。優実に頼んでいるのだ。彼女が本物なら、どうにかしてくれるはず。しかし、自分が朝子のことを忘れ、無意識のうちに彼女を見捨てていたという事実は、彼の気持ちを暗

澹とさせた。
「わたし、工藤さんのお見送りに行きます」
洋介はぎょっとして美奈を見た。美奈は断固とした表情で、彼を見つめていた。
「絶対行きます」
「それは、駄目だ」
洋介はやっとのことで言葉を発した。美奈の顔が不審そうに歪む。
「君を中川との問題に巻き込むわけにはいかないから、だから」
しどろもどろになっている内に、洋介の目に白い花が飛び込んできた。見覚えのある、円い花。可憐で、何故か恋しい。
「あれ、くれないかな」
いきなりの彼の言葉に、美奈はぽかんとして指差す先を見た。
「マーガレット。一輪頂戴」
美奈の顔が、静かに表情を失っていく。ゆっくり、ゆっくりと。彼はその変化の理由に気づかないまま、マーガレットを見つめていた。あの花は、何だっけ。何か大事なものを思い起こさせる。
美奈は、マーガレットを透明で白いレース模様のセロファンに包み、無言で洋介に渡した。彼は笑う。ありがとう、と言う。美奈はひっそりと笑う。どういたしまして。
彼は花屋に来たときと同じように慌てて走り出した。家に着けば安心だ。けれど、朝子は？　彼女をどうすればいい？　彼は少しずつ走る速度を落とし、ぜいぜいと息をつきながら歩き出す。どうすればいい？　彼女は自分を待っているかもしれないのに。
朝子の記憶がモノクロになり、次にセピアになりながら頭の中に蘇る。待っていた、彼女。恐らく梅雨の、雨が降ったある日、濃い色の傘を差して、立っている。レインブーツを履き、長い巻き毛は一つに束ねている。どこで、どうして待っていたのかはわからない。印象的だった、彼女の目。勝気な彼女には似合わない、心細げな目つきをしている。地面を見つめていた彼女は、彼に気づいて傘の下から彼を覗き見る。零れ落ちそうなほど大きな目。唇は少し開いて

いる。彼女はちょっとだけ微笑み、すぐに元の自信なさげな表情に戻る。彼女が気弱な顔をすることは滅多にない。喧嘩をしたときの情景かもしれない。

「愛してる」

頭の中で響いた、彼女の声。震えたようなかすれがちの声。彼女との情事の最中だったのだろうか。耳元でささやかれた声が、妙になまめかしい。彼女の体温さえ、体のそこかしこで再生される。愛おしい、彼女の体。象牙色の滑らかな体。温かで柔らかい。

「洋介、わたしのことはもう諦めなよ」

長い髪をばっさりと切ってしまった彼女が、色彩過剰なほどの鮮やかさで思い浮かぶ。彼女は笑っている。睫毛が黒々と、笑った目元を縁取る。

「わたしはわたしでやっていくから。大丈夫だよ。わたしは奴隷になっても変わらない。平気だよ」

最後の情事のあと、彼が眠っている間に彼女は逃げた。一緒に逃げようと何度も説得したあとのことだったから、彼にはひどく応えた。アパートの部屋は、何も変化がなかった。彼女がやってきて、また来る約束で帰っていったときと同じだった。彼女を探し回り、心臓がうるさいほどに大きく波打つ数日を過ごしたあと、彼は彼女が競りにかけられ、いい値段で売れたということを知った。涙は出なかった。彼女に置いていかれた、という気持ちが強かった。少し恨んでいた。とても愛していたのに、それを裏切られたと思った。会社の仕事が手につかなくなり、上司から早退をするように言われた日、彼は貯金を確認した。彼女と結婚するために貯めていた金だ。その金が相当な額だということを知ると、彼は辞表を書き始めた。

愛していたはずだ。それなのに、どうして忘れてしまっていたのだろう。月日のせいか？　エマのせいか？　他の何かのせいか？　ただ、これだけはわかる。彼は少し、常軌を逸していた。考えや行動が少しおかしいと、自分で気づいていた。彼女への執着の仕方は、愛情のみから来るものではない。彼の中には、彼女に置き去りにさ

れたと感じたそのときから、愛情に加わって彼女に向かわせる、不純な何かが生まれた。それが彼を彼女に向かわせるのだと、彼にはわかっていた。

不純な何かとは、何だろう。そしてそれは一体どこに行ってしまったのだろう。彼女に向かわせていたはずのものが見当たらなくなった。愛情が消えた？　そんなわけがない。今でも彼は自分が彼女を愛していると思っていた。では、何故忘れる？

彼はいつの間にか、自分の借家の前にいた。トタンで壁が覆われた、粗末な家。庭には緑色の草が生い茂っている。これまで、あまり手入れをしなかった。庭のある家が初めてで、手入れの仕方がわからなかったのだ。物干しがあるが、何も干していない。

無言で玄関の引き戸を開く。薄暗い家の中はしんとしている。思い出して、

「ただいま」

と声をかけた。すると、短い廊下の奥にある居間の襖からエマが勢いよく飛び出してきた。彼が驚く暇もなく、彼の体に抱きつく。背中に細い手が回される。エマは全身を彼に押しつける。エマの心臓が鼓動するのが、皮膚越しに伝わってくる。彼は反射的に彼女を抱きしめた。温かな体。とても華奢だ。彼女はもう泣いてはいない。静かに、彼を頼っているだけだ。

おれのものだ、と彼は思った。この長い黒髪も、黒い瞳を浮かべた眼球も、膨らんだ唇も、赤い頬も、湿り気のある皮膚も、細い骨も、小さな内臓も、全てがおれのものだ、と。髪を梳かすのはおれだ。前髪を揃えるのもおれだ。爪を切るのもおれだ。爪を染めるのも、おれだ。彼女はおれのものだ。彼はそう確信した。

エマと一緒に逃げるのだ。朝子は、人に任せるしかない。今はエマが危険で、エマをまず救わなければならない。大丈夫だ。きっとそうだ。

「エマ」

彼が声をかけると、エマは彼の胸に押し当てていた顔を上げた。

心配そうな目つきだ。彼が中川に何かされたと思っているのだろう。
彼は微笑んで、大丈夫、と言った。
「ただ、逃げなければいけない」
エマの目が問う。どういうことですか？
「時間がないよ。おれは君と一緒にこの街を出ることに決めた。それだけ言う。あ、これ、おみやげ」
彼は握り締めていたマーガレットを彼女に渡した。彼女はそれを持ってじっと見つめたあと、洋介から離れて居間に戻った。彼も靴を脱いで追いかける。居間に入ろうとした途端、彼はエマと鉢合わせしそうになった。彼女は何かを持っていた。写真立てだ。朝子の。彼は乾いた笑い声を出した。エマが訊いている。朝子さんはどうするんですか？
「エマ。君はいい子だね」
彼はもう一度彼女の頭を自分の胸に引き寄せた。そして頭を撫でる。彼女が上目遣いで彼を見る。
「朝子のことは、人に任せるしかないよ。時間がないんだから」
エマは目を丸くして彼を見つめた。彼もそれを見つめる。彼女の目が潤み、青みを帯びた白目は充血し始める。どうして泣くのだろう、と洋介は思った。彼が彼女を選んだのだ。喜んでもいいはずだ。
「写真立て、貸して」
彼はエマからそれを受け取ると、裏蓋の止め具を外し始めた。エマが見ている。彼の行動を、少しも見逃さずに。
蓋を外すと、あのときのメモ用紙が出てきた。数字の走り書き。彼はパーカーのポケットの中を探り、携帯電話を取り出した。ためらいなく番号を押す。電話は、三秒ほどで繋がった。
「もしもし」
男の声だ。年配者だろうと思われる、ゆっくりとした声。
「唐沢優実さんはいらっしゃいますか」
彼は少し、緊張していた。これが偽物だったら、彼はエマを連れ帰ることができない。電話の向こうの声は、しばし沈黙していた。

あまりに長い沈黙に彼がうろたえ始めたころ、声は、ああ、とつぶやいた。
「工藤洋介さんですね」
「はい」
緊張が強くなる。エマは写真立てを抱いて彼を見ている。
「わかりました。一時間後にお会いしましょう」
「え？」
「一時間後です。急いで」
電話は切れた。

15

「準備をしよう。エマ、あまり荷物は多くないほうがいいよ。夏服なんかは置いていこう」

エマはじっと立っている。洋介は苛立ちながら、衣装ケースの向こう側から茶色くて古いボストンバッグを取り、自分のものを詰め込み始めた。もう一つ、小さめの白いボストンバッグを見せると、エマの足元に放った。

「早く。急がないといけないだろ？」

エマが近づいてきた。何の用だろう、と訝っていると、彼女は彼の首に手を回し、顔を近づけ、頬に口づけをした。彼が驚いていると、彼女は真顔のまま目で何かを尋ねた。彼は動揺したが、わかったようにうなずいた。

「大丈夫だよ。おれは君と行く」

彼女はしばらく彼の前で伏し目がちになっていたが、やがてのろのろとボストンバッグを拾いに行き、隣の仏間に入っていった。衣擦れの音が聞こえ始め、どうやら衣服を詰め込んでいるらしい。彼のほうも、急いでテーブルの上のノートパソコンを詰め込み、並んでいた大量のマニキュアの瓶を放り込んだ。

彼の準備が終わると、彼女は限界近くまで膨らんだボストンバッグを持って立っていた。ふと、気づく。

「前髪、伸びてるね」

彼女は困惑したように彼を見た。彼はそれに構わず、自分のボストンバッグの中に入っている鋏と櫛とヘアブラシを取り出した。

「切ろうよ」

彼が笑いかけると、彼女は少しだけそれに応じたことを示す笑顔を作り、好きにすればいい、と言わんばかりに手を畳について目を閉じた。彼はうっとりとする。彼女の顔をこうして眺めるのが何度目かはわからないが、この時間はとても甘美だ。彼女は彼を信頼し

ている。それがとても美しいことのように思える。初めあれほど戸惑った彼女の信頼が、今はとても心地いい。
彼は鋏を彼女の髪に差し入れた。彼女の前髪は上の睫毛にかかっていた。数ミリのことなのだ。たった数ミリの髪の毛を彼は気にしていた。
鋏の刃を閉じると、小さな震えが持ち手に伝わってくる。髪の手ごたえだ。髪はそれと同時に彼女から離れ、黄色い畳の上に黒い点をいくつも作った。墨汁を落としたときのようだ、と洋介は思う。染めたことがないのだろうか。エマの髪は恐ろしく黒い。
ゆっくり、そのときを味わうようにして、彼は彼女の髪を切った。彼女のまぶたは閉じている。柔和な、優しい顔立ちの彼女。唇は小さくて、微笑んだような形で閉じている。だが、彼女は微笑んでいるわけではない。こういう顔なのだ。
「できた。この間みたいに失敗しなかったよ」
彼がそう言うと、彼女は本当に微笑んで彼を見た。前髪を短く切りすぎたことがあるのだが、そのとき彼女は一日中彼を許さなかったのだ。
「そうだ。口紅塗りなよ。一回も使ってないだろ？」
彼が思い出してそう言うと、彼女はにっこりと笑ってカーディガンのポケットからあの口紅を取り出した。蓋を開け、ピンク色の棒紅を持って立ち上がろうとする。この部屋には鏡がない。洋介はエマを引きとめ、口紅を奪った。彼女を座らせ、棒紅を土台から繰り出す。
「おれが塗る」
彼女はすっかり慣れきった様子で、微笑んだ。顎を少し持ち上げ、塗ってもらう姿勢になった。洋介は彼女を見つめた。先程とは違い、少しずつ陽気になってきている彼女は、早くしてください、と言っているかのようだった。彼女の顎の線に沿って手を当てて、彼にとって丁度いい姿勢になるように調整する。棒紅で下唇をなぞる。唇が、変形しては元に戻っていく。とても柔らかそうで、弾力がある。

彼は目が離せなかった。下唇から棒紅を離したあと、彼は突然彼女を抱き寄せ、その下唇をそっと噛んだ。彼女が驚いて抵抗する。しかしそれでも彼は彼女の唇を追い求め、ようやく塞いだ。彼女の口から薄荷の香りが漂ってくる。やがて彼女は抗うのをやめ、それを受け入れた。彼は息継ぎをしながら、彼女の唇を何度も吸う。次第に、欲望が高まってくる。彼は彼女の肩を少しずつ押しながら、口づけを続けた。彼女は体が倒れていくのに気づくと、横に逃れようとした。彼はそれを許さず、彼女を一気に押し倒した。

Tシャツの中に手を入れると、案の定熱い体がそこにあった。彼の冷えた手が触れると、彼女は身をよじった。彼の体を押すが、うまく行かない。

彼女の目を、彼は敢えて覗き込んだ。怯えている。しかし、本当の怯えではない。彼が一言、声をかけるだけで、彼女の頬が薔薇色に染まったからだ。

「愛してるよ」

彼女は、彼の首に手を回した。大きく息をしている。彼女の心臓がある辺りに手を置くと、彼女の心臓を直に握っているような錯覚を起こすほどに激しく脈動していた。彼が彼女に対して何をするつもりなのか、わかっているのだ。更に、彼女はそれを許可している。

彼は畳の上の彼女を、じっと見下ろした。こういうことに似つかわしくないように思える彼女が、期待と恐れがないまぜになった表情で彼を見ている。彼は体を沈め、彼女のへそに口づけを落とした。彼女が大きなため息をつく。彼は舌を出し、そっとねぶった。

「ごめんください」

突然の声に、彼は勢いよく体を起こしてから硬直した。彼は座ったまま、Tシャツが首の辺りまでめくれたままのエマを見つめた。エマは頬を赤くして、襖のほうに顔を向けている。

「上がりますよ」

声の主は彼らの都合などお構いなしに廊下を歩いてきているようだった。エマは慌てて起き上がって座る。同時に、簡易な服装は自

然と元の形を取り戻した。髪を手で整えて、襖がいきなり開くときには、少なくとも彼女の格好に乱れがなかった。
「こんばんは」
唐沢優実が立っていた。この間のように、野暮ったい格好をしていて無表情だ。それでも洋介とエマをじっと見て、一瞬顔をしかめた。しかしすぐに元に戻る。
「準備はできましたか？」
優実が訊くと、無言で洋介がうなずいた。優実は転がっている二つのボストンバッグを確認すると、手に提げた汚いトートバッグから何か青くて小さなものを取り出した。洋介は息を呑む。それは彼が持っているものにそっくりだった。受け取り、ぱらぱらとめくる。見覚えのないエマの写真と、見知らぬ名前が印刷されている。本物にそっくりの、偽造パスポートだ。
「エマ、これでここから出られるよ」
彼の声は震えていた。法律を犯すことが恐ろしい彼は、感情の全てを喜びにしてしまうことができなかった。それでも、ほっとした。不本意な形とはいえ、奴隷の街での暮らしが終わるのだ。あの中川からも離れられる。
エマは、嬉しいのかどうか、曖昧な表情をしていた。しかし彼が見ていることに気づくと、すぐに目を細めて笑った。優実が洋介のほうを向く。
「さて、目的地に奴隷解放運動のメンバーを用意しておきますから、教えてください」
洋介は、彼が以前住んでいた関東の街から少し離れた場所を指定した。
「わかりました。ところで、あなたたちは自分たちが法律を犯すということをご存知ですね」
優実が大きな目を洋介とエマに向けた。洋介が怯えた顔になる。
「工藤さんは、奴隷を街の外に連れ出したことを罪に問われます。もしかしたら奴隷商人たちが彼女を『回収』しに来ますから。それ

に、彼女が街の外で暮らすのは大変です。戸籍がないのですからね。だから、われわれは、あなたたちのために尽力します。住む場所を提供いたします」
洋介は感動のあまり、返事ができなかった。怖いことは怖いが、彼らの組織に守られていれば安全な気がした。それに彼は、街の外に出たあとのことを思い悩んでいたのだ。
「わたしも他の方を連れて、あなたがたに同行するつもりです。近くの席に座っても、わたしに声をかけたりしないようお願いします」
「それって、何回目ですか？」
洋介が好奇心に駆られて優実に尋ねると、優実は表情を変えずに答えた。
「奴隷にされた方たちを連れ出すのは、三回目でしょうか。まだ一度も捕まっていません。捕まったら罰金では済みませんし、政府から目をつけられますからね」
洋介はぞっとした。急に、街の外のほうが危険であるような気がしてきた。
「大丈夫です。わたしがうまく計らいますから」
優実は堂々たる態度でそう断言した。洋介はうなずいたが、やはり不安のほうが強い。
「それでは、わたしは一旦帰ります。気をつけて」
優実は安物の腕時計を見て、立ち上がった。
「耳の札を外すのを忘れないように」
そう言い残し、彼女は出て行った。洋介はにわかに時間が気になり、携帯電話を見た。八時二分。約束の一時間後よりも数分早い。恐らく彼とエマの行為をとめるため、慌ててやって来たのだろう。そう考えると、優実が得体の知れない奇妙な人間に思えてくる。しかし、彼は自分がやろうとしていたことのほうが異様に感じた。エマの肉体を貪ることは、あれほど長い間彼が自らに禁じていたことなのに。
彼の、自分に定めた決まりごとが変わり始めていた。それはエマ

を選び、街を出ようとしていることが原因なのかもしれなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9209z/

硝子壜の中のエマ【長編】

2011年12月28日21時51分発行